

東京大学大学院医学系研究科附属
医学教育国際研究センター

活動報告書 NO.7
2016 - 2017

2018年2月

目次

I. 活動業績報告	2
1. 医学教育国際研究センターの大学院機能について	3
1-1 医学教育国際研究センター在籍学生	3
1-2 医学教育国際協力学	3
1-3 保健医療人材育成学、学習者評価学	3
2. 東京大学医学教育セミナー	4
3. 東京大学医学教育基礎コース	7
4. 外国人客員教員	8
4-1 2016 年度招へい 活動実績	9
4-2 2017 年度招へい 活動実績	12
4-3 外国人客員教員マップ	16
5. 医学教育部門.....	17
5-1 東京大学医学部教育総合的改革 FD.....	17
5-2 模擬患者つつじの会	20
5-3 臨床導入実習	22
5-4 共用試験 OSCE・臨床実習後試験	23
5-5 フリークオーター・エレクトィブクラクシッブ	25
5-6 PBL (Problem-based learning) 問題解決型学習	26
5-7 初年次ゼミナール	27
5-8 東京大学臨床推論勉強会	28
5-9 IPE (Inter Professional Education) 多職種連携教育	29
5-10 医学教育モデル・コアカリキュラム等の次期改訂に向けた調査研究	31
6. 医学教育国際協力部門	32
6-1 ラオス国ビエンチャン市における医療廃棄物を中心とし有害廃棄物処理・管理改善に向けた案件化調査.....	32
6-2 モンゴル国一次及び二次レベル医療施設従事者のための卒後研修強化プロジェクト	34
6-3 Pacific Partnership2016 (パラオ) および 2017 (ベトナム) における活動報告	35
II. 研究業績一覧	37

I 活動・業績報告

1. 医学教育国際研究センターの大学院機能について

2013年4月よりセンターは全学から医学部に移管され、協力講座として大学院生を受け入れられる体制となった。これにより医学教育国際協力学部門は継続的に開講する形をとっている。また、2015年度からは、公共健康医学専攻の協力講座としても機能することになった。以下に項目ごとに詳細な内容を示す。

1-1 医学教育国際研究センター在籍学生

以下の3名がセンターの博士課程学生として在籍した。

名前	入学年度	専攻	課程
山本 健	2014年度	内科学	博士
密山要用	2016年度	内科学	博士
林 幹雄	2016年度	内科学	博士

1-2 医学教育国際協力学

国際保健学専攻の協力講座として、2016年度も医学教育国際協力学特論Ⅰ、Ⅱを開講した。また、1名が研究生として在籍した。

名前	在籍時期	専攻
蔡 岡廷 (TSAI, Kang Ting)	2017年9月～2018年8月	国際保健学

1-3 保健医療人材育成学、学習者評価学

2016年～2017年もセンター教員が公共健康医学専攻、行動社会医学大講座において、保健医療人材育成学分野の協力教員として授業を担当した。また、研究室配属の形で以下の3名が在籍した。

名前	入学年度	専攻	課程
竹内慎哉	2015年度	公共健康医学	修士(2年コース)
北野綾香	2017年度	公共健康医学	修士(2年コース)
梶 有貴	2017年度	公共健康医学	修士(1年コース)

(大西)

2. 東京大学医学教育セミナー

ほぼ月例で開催している東京大学医学教育セミナーは、100回を数えるようになった。医学教育の最新の情報を一般の方々を含め、広く発信するセンターを代表する行事と言っても過言ではない。いわゆる医学教育だけでなく、広い医療者の教育を取り上げると共に、教育学や関連領域のスピーカーにも講演を依頼してきた。

講演内容は、基本的に動画を無料動画サイトにアップロードしており、誰でも閲覧可能な形にしている。また、講演資料もダウンロード可能な形でセンターホームページに置いている。このように、新たな情報発信、共有の形も模索し続けていきたい。

(大西)

● 2016～17年 東京大学医学教育セミナー開催実績

開催日	テーマ	講師	参加者数
第 86 回 2016.1.14	医学教育に変化を起こす：リーダーシップ戦略の役割とは？	マラティ・スリニヴァサン 先生 平成 27 年度 東京大学医学教育国際研究センター 特任教授／米国カリフォルニア大学デービス校医学部 教授	26
第 87 回 2016.2.3	新・医学教育モデル・コアカリキュラムへの提言	マラティ・スリニヴァサン 先生 平成 27 年度 東京大学医学教育国際研究センター 特任教授／米国カリフォルニア大学デービス校医学部 教授	17
第 88 回 2016.3.28	小グループ学習の三つの方略：TBL, CBL, PBL	マラティ・スリニヴァサン 先生 平成 27 年度 東京大学医学教育国際研究センター 特任教授／米国カリフォルニア大学デービス校医学部 教授	22
第 89 回 2016.4.21	医学教育モデル・コア・カリキュラムの今後	北村 聖 東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 教授 大西 弘高 東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 講師	23
第 90 回 2016.5.26	駒場におけるアクティブラーニング教育の改革	増田 健 東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部附属共用教育高度化機構初年次教育部門 部門長・教授	19
第 91 回	研究型大学における Faculty	栗田 佳代子	18

2016.6.20	Development の意義と進むべき方向性	東京大学 大学総合教育研究センター 准教授	
第 92 回 2016.7.6	価値と関係性に基づく医療	尾藤 誠司 国立病院機構東京医療センター 教育 研修部臨床研修科 医長	37
第 93 回 2016.9.29	IPE の歴史・理論・多様なプロジェクトからみた日本への実装の現状と課題	酒井 郁子 千葉大学大学院看護学研究科 教授 ／ 専門職連携教育研究センター長	33
第 94 回 2016.10.5	卒前教育・卒後教育の変革と教員の昇進はなぜ関連しあうのか	メアリー・リー 平成 26 年度東京大学医学教育国際 研究センター 特任教授／タフツ大学元 副学長・医学部 教授	6
第 95 回 2016.12.15	医学教育の新たな方向性 (第 1 回) -医学教育の新しいモデル-	リング・スネル 平成 28 年度東京大学医学教育国際 研究センター 特任教授／マギル大学・ 医学部 教授	29
第 96 回 2017.1.23	医学教育の新たな方向性 (第 2 回) -革新的カリキュラムのデザインと管理 運営-	リング・スネル 平成 28 年度東京大学医学教育国際 研究センター 特任教授／マギル大学・ 医学部 教授	23
第 97 回 2017.2.13	医学教育の新たな方向性 (第 3 回) -評価への斬新なアプローチ-	リング・スネル 平成 28 年度東京大学医学教育国際 研究センター 特任教授／マギル大学・ 医学部 教授	25
第 98 回 2017.3.17	医学教育の新たな方向性 (第 4 回) -新しい教育モデルは本当に機能する のか-	リング・スネル 平成 28 年度東京大学医学教育国際 研究センター 特任教授／マギル大学・ 医学部 教授	26
第 99 回 2017.5.19	プライマリ・ケア専門医はなぜ必要か	丸山 泉 日本プライマリ・ケア連合学会 理事長・ 医療法人社団豊泉会 理事長	30
第 100 回 2017.6.16	2500 年前のギリシャの医師ヒポクラテスの“病気の本態・医療・医師”への鋭い洞察について	加我 君孝 初代東京大学医学教育国際協力研究 センター長・東京大学名誉教授	66

第 101 回 2017.9.21	USMLE 臨床能力試験における臨床推論能力評価に関する妥当性	パク・ユンス 平成 29 年度東京大学医学教育国際研究センター 特任准教授／イリノイ大学シカゴ校医学部 医学教育学講座 准教授	30
第 102 回 2017.10.10	医学教育の現状と未来	江頭 正人 東京大学医学教育国際研究センター・医学教育学部門 教授	46
第 103 回 2017.10.27	Reimagining Medical School: The Innovative Medical School Curriculum at Penn State College of Medicine – University Park Regional Campus	ジェフリー・ウォン ペンシルベニア州立大学 ユニバーシティパーク校・リージョナル・キャンパス 医学部 副学部長／平成 24 年度 東京大学医学教育国際協力研究センター 特任教授	12
第 104 回 2017.11.2	マスター・ラーニングを用いた学習者の評価：妥当性, 判定基準設定, 応用	パク・ユンス 平成 29 年度東京大学医学教育国際研究センター 特任准教授／イリノイ大学シカゴ校医学部 医学教育学講座 准教授	30
第 105 回 2017.12.21	医学教育におけるトランスレーショナル・サイエンスと妥当性：業務基盤型評価とそのシステムからの洞察	パク・ユンス 平成 29 年度東京大学医学教育国際研究センター 特任准教授／イリノイ大学シカゴ校医学部 医学教育学講座 准教授	13

3. 東京大学医学教育基礎コース

2011年度から始まった医学教育基礎コースは、本学医学部のFDの一環として、主に新任の医学部教員や附属病院の指導者を対象に、実践的な教育法について学ぶコースである。また、2015年度以降の学内受講者については、2年間で全8回中6回以上受講された方に修了証を発行した。

2016年度は全8回、2017年度は全7回のセッションを実施した。一通り受講することで教育理論の基礎から効果的な教育実践法、応用的なテーマまで学べる内容である。

● 2016年度 医学教育基礎コース開催実績

	日時	テーマ	講師
第1回	2016. 5.13	医学教育はじめの一步	北村・大西・孫
第2回	2016. 6.15	良い教育者になるために	大西・孫
第3回	2016. 7.18	インストラクショナルデザイン	孫
第4回	2016. 9. 6	魅力あるレクチャーの方法	北村
第5回	2016.10.19	教育を計画する	大西
第6回	2016.11.29	アクティブラーニング	孫
第7回	2017. 1.18	臨床推論の教育	大西
第8回	2017. 2.21	プロフェッショナリズムの教育	北村

● 2017年度 医学教育基礎コース開催実績

	日時	テーマ	講師
第1回	2017. 5.17	医学教育はじめの一步	江頭・大西・孫
第2回	2017. 6.14	良い教育者になるために	大西・孫
第3回	2017. 7.18	インストラクショナルデザイン	孫
第4回	2017. 9.12	魅力あるレクチャーの方法	江頭
第5回	2017.10.25	教育を計画する	大西
第6回	2017.11.28	アクティブラーニング	栗田・孫
第7回	2018. 1.17	臨床推論の教育	大西

(孫)

4. 外国人客員教員

2016～2017年には、以下の3名の客員教員の先生方にお越しいただいた。

招聘期間	氏名	所属・職位
2015年10月16日～ 2016年3月29日	マラティ・スリニヴァサン Malathi Srinivasan, MD, FACP	カリフォルニア大学デービス校 医学部 教授
2016年12月1日～ 2017年3月29日	リンダ・スネル Linda Snell, MD, MHPE, FRCPC, MACP	カナダ マギル大学 医学部 医学教育センター 教授
2017年9月1日～ 2018年2月27日	ユンス・パク Yoon Soo Park, PhD	米国イリノイ大学シカゴ校医学部 医学教育学部門 准教授

Srinivasan 先生は、臨床教育、リーダーシップなどに広く活躍いただいた。非常にエネルギーが豊富な方で、教員、事務職員共に非常に鼓舞された。活動の詳細については、活動報告書 No. 6, 2014-2015 を参照いただきたい。Snell 先生は、客員教員として2回目の着任となった（1回目は2006年10月から半年間）。ちょうど北村教授が退任された時期とも重なったが、*deteriorating patient* という臨床教育方法を実践したり、センターのあり方について様々な意見を出したりしてくださった。Park 先生は non-MD ではあるが、医学教育全般に豊富な知識を持ち、研究プロジェクトも多数手がけられた。また、東大での PCC-OSCE データを解析するなど、データに基づいた教育改善の実践を示された。

これまで十数年にわたって、年1～3名程度の外国人客員教員を招いてきた。国内の医学教育に対して最先端の情報を提供するという観点では、以前より国際的な情報のやり取りもスムーズになりつつあるが、一定の役割を果たしていると考えられる。一方、以前はこのポジションのための独立予算が付けられていたが、近年は一括の予算となっていたため、外国人客員教員を招く意義を再検討すべき時期にあるかもしれない。

(大西)

4-3 2016年度招へい 活動実績

教員氏名： リンダ・スネル

カナダ マギル大学医学部 医学教育センター 教授
 Linda Snell, MD, MHPE, FRCPC, MACP
 Professor of Medicine
 Centre for Medical Education
 McGill University, Montreal, Canada



招聘期間・職位： 2016年12月1日～2017年3月29日

職位： 特任教授

略歴： アルバータ大学で人類学を専攻後、1975年に同大学医学部卒業。マギル大学病院内科研修後、1980年同大学医学部教員となる。1988年、米国イリノイ大学医療者教育学修士号取得。マギル大学医学部医療者教育学主任教授、総合内科主任を務めたほか、カナダの内科学会や医学教育学会の要職を歴任。カナダにおけるコア・コンピテンシーの学習・指導・評価、FD、プロフェッショナルリズム、リーダー育成などの分野で研究成果がある。カナダ医学教育学会賞ほか数多くの受賞歴を誇り、米国内科学会名誉会員（MACP）、欧州内科学会名誉会員の称号を持つ。当センターへは2006年度の招聘後10年を経て、二度目の招聘が実現した。

活動実績：

1) 東京大学医学教育セミナー シリーズ講演

「医学教育の新たな方向性」(Future Directions in Medical Education) 全4回
 本シリーズ講演では、医学生や研修医に対する教育・評価の最新モデルに対する挑戦を検証。現状アプローチと変革の必要性を批判的に吟味し、新しい教育モデル、革新的カリキュラム、評価の最新アプローチ、効率や効果の評価方法について、カナダでの事例を用いて説明した。

	開催日	演題
1	2016.12.15	「医学教育の新しいモデル」(第95回セミナー) New Models of Medical Education
2	2017.1.23	「革新的カリキュラムのデザインと管理運営」(第96回セミナー) Designing and Delivering Innovative Curricula
3	2017.2.13	「評価への斬新なアプローチ」(第97回セミナー) Novel Approaches to Assessment
4	2017.3.17	「新しい教育モデルは本当に機能するのか」(第98回セミナー) Do New Education Models Really Work?

2) 研修医・医学生対象 “Deteriorating Patients” 勉強会 (全5回 各回1時間)

- 実施日： 2017年1月18日、2月1日、2月15日、3月1日、3月15日
- 場所： 東京大学医学図書館3階M1室

“Deteriorating Patients” と名づけた学習メソッド (※) にもとづく研修医・学生向けの勉強会。白板のみを用い、学習者に患者の来院をイメージさせることから始める。「23歳男性、海外から帰国後、胸痛で来院。病歴とくになし」などの状況を提示し、まずどのような情報を得たいかを問う。バイタル値などの具体的情報を示し、どのような身体診察や検査を行うか判断を促す。それと並行して、患者の容態の変化を伝え、対処法を議論する。2008年度から行ってきたケースカンファレンスとの主な違いは、患者が苦しみ状況を想定し、時間経過に伴う容態の変化を意識させること、診断をつけると同時に症状の緩和をいかにマネージするかを考えさせることにある。

(※Clinical Teacher. 2008; 5: 93-97)

3) 大学院生への医学教育研究指導

IRCME 所属の大学院生ほか6名を対象に医学教育研究セッション (1.5時間) を計6回開催し指導した。国際学会での発表を控えた大学院生への発表指導、また、それぞれの院生が実施している研究計画・経過報告を踏まえての研究指導を実施した。大学院生からは研究の質向上につながったと好評であった。

	実施日	内容
第1回	2016年12月14日	Asia Pacific Medical Education Conference 予演会
第2回	2017年1月18日	内視鏡の修練に関する質的研究 (大学院生 山本)
第3回	2017年2月1日	Asia Pacific Medical Education Conference 報告会
第4回	2017年2月15日	家庭医のコンピテンシーに関する質的研究 (大学院生 密山)
第5回	2017年3月1日	国際保健に関する質的研究 (大学院生 林)
第6回	2017年3月15日	Peer learning に関する混合研究法 (客員研究員 野村)

4) 書籍の共同執筆

『医学教育を理解する, 第3版 (Understanding Medical Education, 3rd Ed)』というタイトルの書籍に、“Instructional design: applying theory to teaching practice”というチャプターの記載を Linda Snell 教授と共に孫、大西が担当。2018年夏に Wiley-Blackwell 社より出版予定。

5) 学外での講演・指導

日 時	内 容	実 施 場 所
2016年12月21日	講演 ～世界の“医学教育”最前線～「優れた医療者はどのように育てられるのか？」	昭和大学医学部
全3回：2017年1月31日、2月7日、2月21日	海外臨床実習予定学生へカルテの書き方などの指導を行った	順天堂大学医学部
2017年2月16・17日	○教育回診での指導 ○講演“Professionalism: What is it, why is it important, and how do we learn it?”	宮崎大学医学部地域医療・総合診療医学講座
2017年2月23・24日	岐阜県の臨床指導医の指導能力向上のためのセミナーおよび指導・助言	岐阜県医師育成・確保コンソーシアム
2017年3月6日	リサーチミーティングにおける指導助言	京都大学大学院医学研究科医学教育推進センター

4-4 2017年度招へい 活動実績

教員氏名： ユンス・パク

イリノイ大学シカゴ校医学部 医学教育学講座 准教授

Yoon Soo Park, PhD

Associate Professor

Department of Medical Education

College of Medicine

University of Illinois at Chicago, USA



招聘期間： 2017年9月1日～2018年2月27日

職位： 特任准教授

略歴： 韓国ソウル生まれ。米国マサチューセッツ州の寄宿学校を卒業後、コルゲート大学で数学と日本語を専攻。2003年、大学卒業後に韓国へ戻り、政府の教育政策開発センター研究員、韓国国会の上級政策担当秘書官、徴兵制による兵役を務め、2007年に再び渡米。コロンビア大学教育学大学院で応用統計学修士、同大学院で測定・評価・統計学の博士号を取得。2012年1月にイリノイ大学シカゴ校医学部・医学教育学講座の教員に迎えられ、2017年7月准教授に就任。主な研究分野は、臨床推論（診療録記載における診断仮説と病歴・診断内容の整合性）、コンピテンシー基盤型医学教育（コンピテンシー評価とマスタリー・ラーニングの妥当性検証）、心理測定・統計。

活動実績：

1) 東京大学医学教育セミナー 講演

	開催日	演題
1	2017.9.21	「USMLE 臨床能力試験における臨床推論能力評価に関する妥当性」 Validity Studies on the Assessment of Clinical Reasoning Skills Using Patient Notes (第101回セミナー)
2	2017.11.2	「マスタリーラーニングを用いた学習者の評価：妥当性、判定基準設定、応用」 Assessing Learners Using Mastery Learning: Issues in Validity, Standard Setting, and Applications (第104回セミナー)
3	2017.12.21	「医学教育におけるトランスレーショナル・サイエンスと妥当性：業務基盤型評価とそのシステムからの洞察」 Translational Science and Validity in Medical Education: Insights from Workplace-Based Assessments and Assessment Systems (第105回セミナー)

4	2018.1.16	「米国の卒前医学教育におけるカリキュラムのトレンド：臨床前教育の身体診察とレジデンシーへの準備カリキュラム」 Curricular Trends in U.S. Undergraduate Medical Education: Examples from Pre-Clinical Teaching of Physical Examination and Preparatory Curriculum for Transition to Residency (第 106 回セミナー)
5	2018.2.9	「医学部卒業時の臨床能力評価：東大 PCC-OSCE の評価構造と信頼性」 “Assessing Clinical Skills of Graduating Medical Students: Evaluating the Assessment Structure and Reliability of the University of Tokyo Post-Clinical Clerkship Examination” (第 107 回セミナー)

2) 大学院生対象 量的研究セミナー

“Seminar on Quantitative Methods in Health Professions Education”

1 回 1.5 時間 全 8 回 参加者 5 名

- 実施日： 2017. 10/11、10/25、11/15、11/22、12/13、12/20、2018. 1/17、1/3
- 場所： 東京大学医学図書館 3 階 M1 室
- 内容： IRCME 所属の大学院生の量的研究手法習得を目的として企画された。本講座は実証研究で量的推論を実践するための入門編。特に、医療者教育学の分野で一般によく使われる記述統計および推計統計学の解釈と実行に重点が置かれた。統計ソフト SPSS を使用し、解析の実践演習が多く盛り込まれた。リサーチクエスチョンを量的データ解析に落とし込み学術論文に活用し、査読雑誌への投稿に至らしめることを目的とした内容であった。

3) 東京大学教員との共同研究

- 大西弘高講師との共同研究
 - (1) “School of Public Health Interview Data Analysis” – September 13, 2017
 - (2) “Analysis of Clinical Reasoning using G-Theory: VSOP Data” – October 6, 2017
 - (3) “Combining Scores to Assess Resident Readiness for Unsupervised Practice: Evidence from Family Medicine Specialist Certification Examination in Japan” – manuscript submitted to Academic Medicine (submission date: December 11, 2017)
- 孫大輔講師との共同研究
 - (1) “Differences in Expectations of Passing Standards in Communication Skills for Pre-Clinical and Clinical Medical Students” – manuscript submitted to Patient Education & Counselling (submitted on: January 15, 2018)

- (2) “An Evaluation of Post-Clinical Clerkship Examination at the University of Tokyo: Reliability and Psychometric Analysis” – abstract submitted to the Annual Meeting of AMEE (submitted on February 2, 2018)
- (3) “Development and Validation of the Japanese Version of the RUCIS Scale to Assess Medical Trainee and Clinician Communication and Interpersonal Skills” – multi-site project with Chiba University, Juntendo University, Tokyo Medical and Dental University, and University of Tokyo (project to begin in April 2018)
- 堀田晶子助教（医学部臨床実習・教育支援室）との共同研究
 - (1) “Pre-Clinical Clerkship Objective Structured Clinical Examinations Predict Placement in Japan Residency Match Program (JRMP)” – abstract submitted to the Annual Meeting of AMEE (submitted on January 31, 2018)
- ジョゼフ・グリーン講師（医学部国際交流室）との共同研究
 - (1) “Patterns of Change after Health Education for People with Chronic Diseases: A Decay-Of-Impact Trajectory Revealed by Growth Mixture Modeling” – abstract submitted to the Annual Meeting of the Academy of Health Forum (submitted on February 5, 2018)
 - (2) “Identifying Growth Trajectories of Patients after Health Education” – manuscript under preparation for submission to the American Journal of Public Health (AJPH) (targeting March 2018)

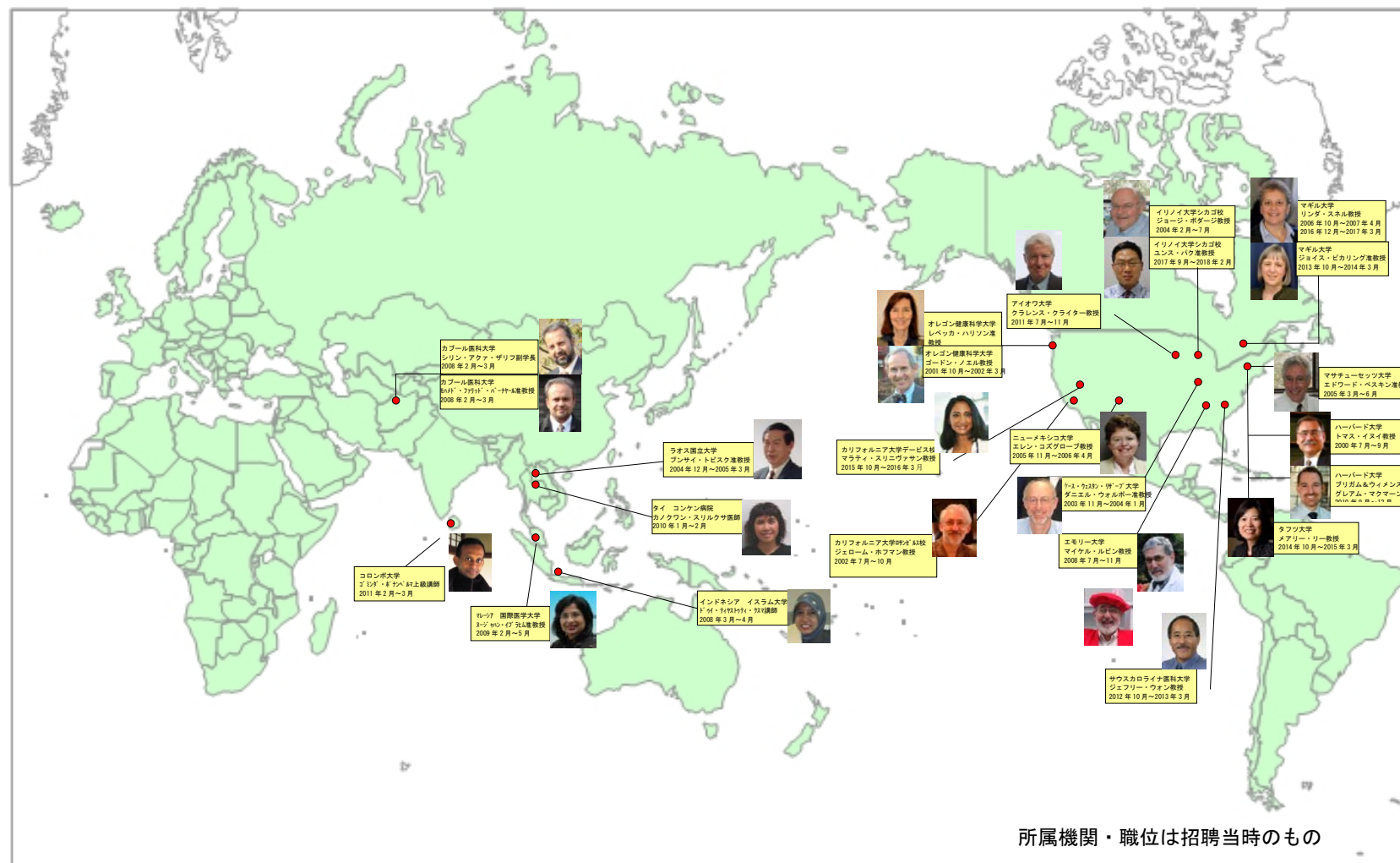
4) 学外からの招請講演等

実施日	内容	場所
2017年9月24・25日	American Educational Research Association (AERA) 会議出席	米国、ボストン
2017年11月3～7日	アメリカ医科大学協会（AAMC）Learn Serve Lead Meeting 出席	米国、ボストン
2017年11月19日	ワークショップ「一般化可能性理論について：入門編」講演および演習指導 日本医学教育学会学習者評価委員会・教育研究委員会主催、東大 IRCME 共催	東京大学
2017年12月7日	“Aligning Medical Education with Outcomes-Based Research” 講演	東京大学耳鼻咽喉科医局

2017年12月19日	Meeting for Certificate / Master's Program in Medical Education in Japan パネリスト 京都大学大学院医学研究科 医学教育・国際化推進センター主催	京都大学
2018年1月10日	“Aligning Medical Education with Outcomes-Based Research” 講演	東京大学医学部教授総会懇談会
2018年2月4日	「臨床実習後の評価の開発～評価の理論と経験的証拠からの検討～」講演 日本医学教育学会学習者評価委員会・教育研究委員会主催、東大 IRCME 共催	東京大学
2018年2月16日	「臨床実習後の評価の開発～評価の理論と経験的証拠からの検討～」講演 京都大学大学院医学研究科 医学教育・国際化推進センター主催	京都大学

(大西・三浦)

4-3 IRCME 招聘 外国人客員教員マップ



5. 医学教育部門

5-1 東京大学医学部教育総合的改革FD

2016年～2017年に、医学部教育総合的改革FDを下記のように実施した。いずれも、実質的な教育改革につなげていくための充実した内容であった。

1) 2015年度 第3回東京大学医学部教育総合的改革FD

- 日時：2016年2月11日（火）～12日（水）
- 場所：医学図書館3階 333教室
- 参加人数：（1日目）13名、（2日目）20名
- 主催：東京大学医学部・医学教育国際研究センター
- テーマ：「メンタリングについて（11日臨床指導医向け、12日指導者向け）」

UCSF（カリフォルニア大サンフランシスコ校）の Mitchell Feldman 教授を招聘し、メンタリングに関する内容についてFDを実施した。メンタリングに関して、Feldman 教授はその研究、実践応用において米国でも第一人者の1人であり、1日目は臨床指導医向け、2日目は研究指導者向けにメンタリングに関して様々なことを学んだ。

■ プログラム

2/11 "mentoring for clinical training sites"	
13:00 ~ 13:10	Opening remarks (Dean Miyazono)
13:10 ~ 14:10	Plenary "What is mentoring" (Dr. Feldman)
14:10 ~ 15:30	Group work and discussion "what is mentoring"
15:30 ~ 15:40	break
15:40 ~ 17:00	Group work and discussion "core knowledge and skills of competent mentors"
17:00 ~ 17:40	Strategic planning
17:40 ~ 18:00	Wrap up
2/12 "mentoring for research trainees"	
17:30 ~ 18:10	Plenary "What is mentoring" (Dr. Feldman)
18:10 ~ 18:50	Group work "Individual Development Plan"
18:50 ~ 19:10	Discussion
19:10 ~ 19:30	Strategic planning & Wrap up

2) 2016年度第1回東京大学医学部教育総合的改革FD

- 日時： 2016年6月10日（水）18:00～20:00
- 場所： 医学図書館3階 333教室
- 参加人数： 24名
- 主催： 東京大学医学部・医学教育国際研究センター
- テーマ： 「イヌイ・プロジェクトから15年を経て：東大医学部教育の過去・現在・未来」

2000年に文部省特別招へい教授として招聘された Thomas S. Inui 教授による Inui Project では、本学医学部の医学教育の長所・短所が指摘され、以来その報告を踏まえ、研究室配属の充実化、PBL チュートリアル教育の導入、臨床診断学実習の充実化など、さまざまな教育改革が実行されてきた。その後も、2009年度の医学教育改革ワーキンググループによる教育改革プラン、2014年度の国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会による自己点検および外部評価などを経て、教育改革の試みが続けられている。

今回のFDでは、Inui 教授をお招きし、この15年の教育改革の歩みを振り返っていただき、本学の医学教育の未来へ向けて提言を行って頂いた。またそれを踏まえて、本学の医学教育に深く関わってこられたパネリストの先生方を迎えパネルディスカッションを行い、参加者との全体討論を行なった。

■ プログラム

18:00 ~	18:05	開会挨拶
18:05 ~	18:10	Inui プロジェクトについて（北村聖先生）
18:10 ~	18:50	Inui 教授講演 “Curriculum Stagnation at Todai School of Medicine – A Sober Analysis”（英語）
~		
18:50 ~	19:00	質疑応答
19:00 ~	19:40	パネルディスカッション（日本語） パネリスト：大滝純司先生、加我君孝先生、黒川清先生、 高本真一先生、福原俊一先生、松村真司先生（50音順）
19:40 ~	19:55	全体討論
19:55 ~	20:00	まとめ

3) 2016年度第2回東京大学医学部教育総合的改革FD

- 日時： 2016年10月12日（水）17:00～18:00
- 場所： 医学図書館3階 333教室
- 参加人数： 40名
- 主催： 東京大学医学部・医学教育国際研究センター／東京大学医学部学生支援室

- テーマ： 「チューターによる学生支援のあり方について～コミュニケーションスキル不足の学生にどう支援するか～」

2016年度のチューターFDでは、前年度に引き続き「チューターによる学生支援のあり方について」をテーマとした。内容は、コミュニケーションスキル不足のためにトラブルを起こした学生の事例を呈示し、バリアフリー支援室の桑原斉氏より、そのような学生への対応のポイントや全学的な取り組みについて説明してもらった。

その後のグループディスカッションでは、参加者が実際に対応に苦勞した事例や対応方法について共有し、今後の学生支援のあり方について議論した。

- プログラム：

1. チューター制度（医学科）の変更点について（菊地）
2. 事例紹介（細谷）
3. コミュニケーションスキル不足によりトラブルを多発するケースについての対応のポイント、および、全学的な取り組みについて（桑原）
4. グループディスカッション
5. グループごとの発表

(孫)

5-2 模擬患者つつじの会

模擬患者つつじの会は東京大学と東京医科歯科大学のコンソーシアムで模擬患者養成を行っている。2017年度は新たに7名（男性3名、女性4名）の新时期（6期生）を迎えた。会員は合計36名となり、男性5名、女性31名である。平均年齢は63.4歳となっている。2017年4月から7月まで4回の模擬患者養成コースを実施し、8月に養成コース修了試験を行った。修了試験では学生を相手に、模擬患者として適切な演技ができるか、シナリオに忠実なやり取りができるか、フィードバックを適切に行えるかを評価し、全員合格となった。養成コースでは先輩SPが今までの経験を活かして、積極的に指導する立場にまわっており、屋根瓦式教育が実現できている。

学内教育においては、M2の医療面接実習、共用試験OSCEに協力、また、M4の臨床実習後試験にも協力しており、医学教育において不可欠の存在となっている。

1) 2016年度 定期勉強会

日程	内容
第1回 4月19日	・講義「医学生の共感とコミュニケーション教育」 ・演習：FBを考えてみよう!
第2回 6月14日	・講義「高齢者医療面接の模擬患者について」 ・演習：「高齢患者シナリオの演技について」
第3回 8月2日	・講義「腰痛の予防と治療の最前線」（東大附属病院 松平浩先生） ・演習：「腰痛」シナリオを演じてみよう
第4回 10月4日	・講義「生活習慣病について～動脈硬化」 ・講義／演習「卒業試験 OSCE・CSA について」
第5回 1月24日	・講義／演習「OSCE について語ろう」
第6回 3月7日	・自主勉強会／演習

2) 2017年度 養成コース

日程	内容
第1回 4月11日	・ 講義：「よいコミュニケーションとは？」 ・ 講義：「模擬患者としての心構え・演技方」 ・ 演習：シナリオの読み方とデモンストレーション
第2回 5月23日	・ 講義：「OSCE、試験について：授業と試験の違い」 ・ 演習：「胸痛」シナリオを使ったロールプレイ

第3回 6月20日	<ul style="list-style-type: none">・ 講義：「フィードバックについて」・ 演習：「咳」シナリオを使ったフィードバックの練習・ 先輩 SP に聞いてみよう！
第4回 7月18日	<ul style="list-style-type: none">・ 演習：学生さんを相手にしたロールプレイとフィードバック・ 先輩 SP に聞いてみよう！ Part 2
第5回 8月22日	<ul style="list-style-type: none">・ 6期生模擬患者養成コース修了試験・ 修了式

(孫)

5-3 臨床導入実習

2016年度より、6年(M4)の12月に臨床実習後試験が導入されることから、4年(M2)の共用試験 OSCE の時期が12月から10月に前倒しされた。この変更にもとない、従来の「臨床診断学実習」のスケジュールとその内容も見直し、「臨床導入実習」に名称変更し、共用試験 OSCE およびクリニカルクラークシップ（臨床実習）の準備教育という位置づけを明確化した。

2017年度は、5月に「臨床導入実習オリエンテーション」を江頭教授が、また「医療面接実習総論」を孫が担当し、医療面接の基本、および医療コミュニケーションの講義を行った。5月26日～7月7日まで毎週金曜日に医療面接実習と救急医療実習を実施した（7週、2班ずつ）。実習には江頭、堀田、孫で実習指導にあたった。2017年度より、この実習に出席することを共用試験 OSCE 受験のための必須条件とした。そのため、出席率や態度に昨年度より明らかな改善が見られた。強化実習（追再実習）を7月14日に行い数名の学生が出席した。

また、2017年10月以降の後半は下記のようなスケジュールで実施した。翌年1月からのクリニカルクラークシップで必要となる知識や技能を中心として、臨床推論、医療コミュニケーション、医療安全、接遇、などの授業と演習を実施した。

■ 2017年度臨床導入実習（後半）スケジュール

10/27 金	13:05 開始	臨床推論（孫講師）
11/10 金	13:05 開始	医療コミュニケーション（石川ひろの准教授） 臨床推論（孫講師）
11/17 金	13:00-15:50	医療安全（中島勸准教授）
11/24 金	13:00-14:50 15:00-15:50	医療機器管理（張講師） 医療現場の接遇（目賀田顧問）
12/01 金	09:30-12:00	クリニカルクラークシップ説明会（江頭教授、堀田助教）
12/08 金	13:00-15:50	医療機器管理（張講師）

5-4 共用試験 OSCE・臨床実習後試験

1) 共用試験 OSCE

4年生(M2)に対し、10月に共用試験 OSCE を実施した。学生たちは、医療面接実習を含む臨床導入実習に加え、自主的に準備を重ねて OSCE に臨んでいた。医療面接ステーションにおいては当センターが養成している模擬患者つつじの会の SP が模擬患者として協力しており、事前の練習会を開催し標準化に努めた。

■ 東京大学医学部共用試験 OSCE 実施概要

● 2016 年度

実施日	2016年10月1日(土)
実施場所	医療面接－医学部2号館(本館)地下1階チュートリアル室 身体診察－附属病院外来診療棟3階 救急－医学部2号館(本館)3階チュートリアル室
総括責任者	栗原裕基(東京大学医学部教務委員長)
運営責任者	江頭正人(附属病院教育・研修部准教授・東京大学医学部教務委員 OSCE 担当)
対象学生	医学部医学科4年生 117名
課題内容	医療面接・頭頸部診察・胸部診察またはバイタルサインの測定・腹部診察・神経診察・救急

● 2017 年度

実施日	2017年10月12日(土)
実施場所	医療面接－医学部2号館(本館)地下1階チュートリアル室 身体診察－附属病院外来診療棟3階 救急－医学部2号館(本館)3階チュートリアル室
運営責任者	江頭正人(東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター教授・東京大学医学部教務委員 OSCE 担当)
対象学生	医学部医学科4年生 104名
課題内容	医療面接・頭頸部診察・胸部診察または全身状態とバイタルサイン・腹部診察・神経診察・救急または基本手技

2) 臨床実習後試験

2016 度より従来の卒業試験(筆記試験)に代えて、新たに臨床実習後試験を6年生(M4)

に実施することとなった。2016年3月より臨床実習後試験委員会および同準備委員会において当センター医学教育学部門も準備・運営に加わった。

試験には、模擬患者つつじの会のSP 20名以上が医療面接の模擬患者として協力した。学生が受験するステーションは、臨床シナリオステーションから2ステーション（15分ずつ）と、臨床手技ステーション（5分）1ステーション、計3ステーションであった。臨床シナリオステーションは、最初の5分が医療面接、次の5分が身体診察、最後の5分が口述問題であった。

2017年度は、学生が受験するステーション数を増やし、学生あたり5ステーションの受験となった。特に臨床手技ステーションを2つに増やし、手技の習得を合格基準として重視した。

■東京大学医学部臨床実習後試験実施概要

● 2016年度

実施日	2016年12月10日（土）
実施場所	附属病院外来診療棟3階
総括及び実施責任者	瀬戸泰之（臨床実習後試験委員会委員長）
総括及び実施担当者	江頭正人（臨床実習後試験委員会幹事）
医療面接模擬患者担当者	孫大輔（臨床実習後試験委員会幹事）
対象学生	医学部医学科6年生 113名
課題内容	臨床シナリオステーション5シナリオのうち2シナリオ 臨床手技ステーション1つ

● 2017年度

実施日	2017年12月9日（土）
実施場所	附属病院外来診療棟3階
総括及び実施責任者	瀬戸泰之（臨床実習後試験委員会委員長）
総括及び実施担当者	江頭正人（臨床実習後試験委員会幹事）
医療面接模擬患者担当者	孫大輔（臨床実習後試験委員会幹事）
対象学生	医学部医学科6年生 106名
課題内容	臨床シナリオステーション（選択）6シナリオのうち2シナリオ 臨床手技ステーション2つ、臨床シナリオステーション（共通）1つ

（孫、澤山）

5-5 フリークォーター/エレクトィブクラークシップ

2016年1月～3月にかけて、3年生（M1）2名をフリークォーターで、5年生（M3）2名をエレクトィブクラークシップとして受け入れ、研究や実習の指導にあたった。

フリークォーターの市川貴一さん（M1）は「医学教育と歯学教育の統合についての考察」、森川涼介さん（M1）は「医学教育における厚生労働省と文部科学省：大学病院での臨床研修を一つのテーマとして」というテーマで、文献レビューを行い、発表を行った。

エレクトィブクラークシップでは、1月に沖縄・南大東島で10日間の実習を行ってきた高木祐希さん（M3）が、島で唯一の医師の診療を見学したのみならず、保健師の高齢者訪問や、社会福祉協議会、母子保健推進員などの活動に付き添い、また農業体験など島民の暮らしを知るための経験などが語られ、離島の医療と保健予防活動に関して幅広く学んだことを報告した。2月に配属された松下翔さん（M3）は、「病気の子どもとご家族のための滞在施設は、利用者およびボランティアによってどのような意義が存在するか」というテーマで質的研究を行った。東大病院の附属施設である「ドナルド・マクドナルド・ハウス東大」の利用者およびボランティアにインタビューを行い、その施設が彼らにとってどのような意義があるかを、SCAT法を用いて分析したものであった。研究の結果は、原著論文「病気の子どもとご家族のための滞在施設は、利用者とボランティアにとってどのような意義を持つか」（日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌 8(1): 31-48, 2017）として発刊された。

2017年1月～3月にかけては、5年生（M3）2名をエレクトィブクラークシップで受け入れた。1月に配属された古賀健太郎さん（M3）は、愛媛生協病院（愛媛県）と諏訪中央病院（長野県）で実習を行い、「地域に密着した急性期病院の役割について」という発表を行った。高齢化社会における地域医療の現状と、健康増進活動など地域での予防・ヘルスプロモーションについての必要性などが語られた。3月に配属された加納健史さん（M3）は、隠岐島前病院（島根県）と雲南市立病院（島根県）で実習を行い、「僻地・離島の成功している病院で働く総合診療医の仕事」という発表を行った。僻地の病院における地域医療の現状、また総合診療医の働き方や生涯学習の方法などについて考察されていた。

（孫）

5-6 PBL(Problem-based learning)問題解決型学習

2009年から東京大学において、4年生(M2)を対象に、PBLチュートリアルを行っている。テーマはMedical Humanityとして、日頃の学習では見過ごされてきている内容を扱うようにしている。PBLはカナダ、米を中心に1980年代頃から始められ、我が国においては2010年頃からはほとんどの大学で始められた。

東京大学では、教科書の丸写しではなく、自ら考える必要のある課題を課するためにプロフェッショナリズムやヒューマニティに関連した課題・症例を選んで取り入れている。

2016年度からは2年生(M0)に移行する方針となり、2017年度までの2年間はM0とM2の2学年で、4回ずつのPBLチュートリアルを実施した。小グループの構成は学年を14班に分け、1グループ7~8人の学生が含まれ、それぞれの班に教員がファシリテーターとして配属されている。シナリオは、脳死・臓器移植をテーマとし、そこから救急医療の問題、脳死と臓器移植をめぐる課題、医療倫理に関するトピックなどを学んでもらうこととしている。それぞれ3~4週にわたって自己学習、グループ討論を繰り返すことにしている。

PBLチュートリアル教育の今後の課題として、大きく2点ある。ひとつ目は、ファシリテーター教員の確保である。かなりの時間を割かれるため、教員の負担は大きく、何らかのインセンティブも重要と考えられる。第2は、課題シナリオの作成である。常に、時宜を得た課題を課することが学習意欲を高めると思われる。

2018年以降は、2年生(M0)秋学期のみで、10回シリーズで実施予定である。臨床的に重要な疾患・テーマに関して、倫理的側面のみならず、多角的に学んでもらえるような内容も検討していく予定である。

(孫)

5-7 初年次ゼミナール

● 駒場教養学部 初年次ゼミナール（理科）2017.5～7

2015年度より始まった初年次ゼミナール理科は、教養学部1年の全学生を対象としたチュートリアル形式の授業であり、入学直後の学生の学びの意識を改革することで、自発的に学ぶ姿勢を涵養することを目的とする。2017年度は、江頭は、「老化のメカニズムに迫る」と題し授業を行った。まず超高齢社会や個体の老化の諸問題につき、一般メディアの記事などを題材に、ブレインストーミングなどを行い、「検証可能なりサーチクエスチョン」を抽出する作業をおこなった。後半は3-5名のグループを形成し、それぞれのクエスチョンに対する（仮の）研究計画書をデザインすることを目標に授業をおこなった。授業ではわかっていることと検証すべき課題を区別すること、網羅的な検索をおこなうこと、一次資料にあたること、データにもとづく論考をおこなうこと、などを強調し、進捗状況につきグループ間でディスカッションを行い、プロセスを共有し、より適切な計画作成が実践できるよう工夫した。最終的には、研究計画についてプレゼンテーション、質疑応答をおこなうことで、課題についての理解を深めた。学生からは、問題解決のプロセス、グループワーク、プレゼンテーションを体験することで学習が深まった、との感想を得ている。原著論文を読むことと、データの収集と解析とが実施できなかったが、それ以外には学習目標は概ね達成できたと考えている。

(江頭)

5-8 東京大学臨床推論勉強会

東京大学臨床推論勉強会は、臨床推論の基礎から各症候についての診断プロセスを学べる有志勉強会であり、毎年4年生（M2）の希望者が参加している。2016年度からは、学生が主体的に運営するようになっており、また5～6年生も数名参加して指導する形の、屋根瓦式教育に変わってきた。4月から11月の毎週水曜昼（12～13時）に、計20回ほど開催している。

進め方は、参考書として「考える技術：臨床的思考を分析する」（日経BP社）を主に用い、1回につき1～2つの症候を取り上げた。前半は基本的な症例について、鑑別診断を考えるケース。後半はやや難易度の高い症例について、鑑別診断を挙げながら臨床推論を進めていく形とした。扱った症候は、「発熱（不明熱）」「腹痛」「胸痛」「呼吸困難」「頭痛」「黄疸」「めまい」「背部痛」「意識障害」「失神」「下痢」「浮腫」「咳嗽」「消化管出血」「貧血」「急性腎障害」「かぜ症候群」「出血障害」「高血圧」「発疹」「血尿」「体重減少」などの症候であった。

臨床推論のパターン（仮説演繹法、パターン認識、徹底検討法）を意識しながら、症候ごとに鑑別する上でのポイントを学び、また具体的にどのように患者に問診すれば良いかも学べるように工夫した。

（孫）

5-9 IPE (Inter Professional Education) 多職種連携教育

東京大学では2015年度より、医学部医学科および健康総合科学科（看護学コース）の合同による多職種連携教育（IPE）を行っている。2017年度からは、薬学部も加わり、医薬看合同の授業となった。2016年度は1回、2017年度は3回のIPE授業を行った。

2016年4月8日に、医学科4年生（約100名）および看護学4年生（7名）合同によるIPE授業を行った。学習目標は、各専門職（医師・看護師・薬剤師・管理栄養士）の役割・専門性を理解し、多職種でのコミュニケーションについて学ぶこととした。糖尿病のケースを用い、グループに分かれて、模擬カンファレンスを行い、医療面接のロールプレイで、模擬患者に問診と方針説明をするというワークを行った。模擬患者は、つつじの会SPが演じた。看護学生は看護師役を演じ、医学生は医師役、薬剤師役、管理栄養士役を演じた。

2017年4月7日に、医学科4年生（約100名）および看護学4年生（7名）合同によるIPE授業を行った。学習目標は、多職種連携の基礎となるチームワークやコミュニケーション、相互理解などについて学ぶことである。今回はACP（Advanced Care Planning）のシナリオを用い、終末期ケアにおける意思決定を医師や看護師の立場でどう考えるか、患者家族の立場を多職種で協働しながらサポートするにはどうすればよいかという課題について、グループに分かれて演習した。学生は、医師役、看護師役、患者家族役に別れ、ロールプレイを行い、その後、医療倫理の四分割表を用いてロールプレイの振り返りを行なった。その後、全体共有し、ACPについてのミニレクチャーを行なって終了した。学生の感想（アンケート）では「こういう画面にあっては情に訴えかけ、共感するということが重要だと気付いた。普段の勉強とは真逆の頭の使い方をして、このような能力の重要性に気づき貴重な機会となった」（医学生）、「ケア以外において看護師の役割、看護師にしかできないことは何だろうと思った」（看護学生）などの気づきが述べられていた。

2017年11月7日には、医学科2年生（M0）（約100名）、看護学2年生（約30名）、および薬学部4年生（14名）合同によるIPE業を行った。学習目標は、人の健康に関わる多様な価値観を、複数の専門職の視点で理解することとした。最初に「健康」および「患者」に関する講義（健康の定義、健康の4側面、患者像の変化）を行い、その後、あるがん患者の闘病記を事例として、グループワーク（ディスカッション）と個人ワークを行った。グループワークでは、自分が患者の担当医師や看護師、薬剤師だったらどう関わったか、といったことを考えさせた。

2017年12月1日には、医学科4年生（約100名）、看護学3年生（13名）、薬学4年生（13名）によるIPE授業を行った。学習目標は、多職種でのコミュニケーションとチームワークを学ぶこととした。グループに分かれ、糖尿病のケースについて、模擬カンファレンスと医療面接のロールプレイを実施した。医学生は、医師役のみならず、管理栄養士の役も演じ、看護学生および薬学生は、そのまま自分の職種を演じた。模擬患者はグループ担当の教員が演じた。

東京大学のIPE授業は、まだ始まってまもなく、IPEにおける学習目標が多岐にわたる

ため、毎回、その内容をどのようにしたら学生にとって最適の学びになるのか、苦慮しているところである。他大学の先進的取り組みなども参考にしながら、さらに発展させていく予定である。

(孫)

5-10 医学教育モデル・コアカリキュラム等の次期改訂に向けた調査研究

本案件は、2016年度の医学教育モデル・コア・カリキュラム改訂に向けた意見集約や英語化を行うための文部科学省委託事業「大学における医療人の在り方に関する調査研究委託事業」の一部として実施されている。2017年度は、「医学教育モデル・コア・カリキュラム等の次期改訂に向けた調査研究」という名称となり、①医学教育モデル・コア・カリキュラム（以下コアカリ）の英訳、②シンポジウムの開催、の2つの内容を実施することとなった。

コアカリの英訳については、2015年度に2010年度版の翻訳がなされたが、海外の先生方に日本のコアカリの長所を伝えるためには、精度が十分でなかった。今回、歯学教育モデル・コア・カリキュラムの翻訳もなされることとなり、内容的にも共通できる部分は共通させるという観点で調整を図った。

また、2016年度の研究班において各領域について記載をお願いした委員の先生方にも英訳内容を確認していただいた上で、2018年1月～2月にかけて各大学、学会に意見照会をかけ、その内容をさらにまとめ直して、最終的なプロダクトにする予定である。

班会議およびシンポジウムは2017年12月14日に開催した。卒前・卒後教育の連携、社会医学や行動科学の充実、診療参加型臨床実習の充実、「腫瘍」の充実、シミュレーション教育の位置付けの明確化といった側面から最前線におられる先生方に意見、講演を賜り、意見集約を図った。

これらの成果については、2018年2月14～19日に大西がマギル大学医学教育センターのLinda Snell教授らと会談し、今後の日本の医学教育モデル・コア・カリキュラムのあり方について意見交換する予定である。その結果を、医学教育モデル・コア・カリキュラム等の次期改訂に活かしたい。

(大西)

6. 医学教育国際協力部門

6-1 ラオス国 ビエンチャン市における医療廃棄物を中心とした有害廃棄物処理・管理改善に向けた案件化調査

ラオスでは、人口の増加と経済成長に伴い、廃棄物の排出量が急増している。特に病院から出される感染性廃棄物は感染、傷害のリスクがあり、課題となっている。しかし、廃棄物処理に対する技術が低く、リスクへの理解が不十分な現状において、適切な廃棄物処理が行われているとは言い難い状況が続いている。本案件は、ラオスにおける有害廃棄物処理の現状を調査すると共に、今後の管理改善に向けた提案を行う JICA の案件化調査である。

1) プロジェクト実施主体

- 提案企業：加山興業株式会社（愛知県豊川市）
- 協力機関：カーボンフリーコンサルティング、豊橋技術工科大、東京大学
- サイト・カウンターパート機関：ラオス国ビエンチャン市ビエンチャン都市開発行政機構（VUDAA）

2) 現状

1. 医療廃棄物の適正処理
 - (a) 導入された焼却炉の処理能力を超える医療廃棄物の搬入量
 - (b) 院内における不十分な医療廃棄物の分別
2. 中小企業の技術・製品
 - (a) 未焼却処理の医療廃棄物排出量及びその他の有害廃棄物量に即した規模の焼却炉の導入及び焼却処理体制の整備
 - (b) 医療廃棄物の分別収集適正化

3) 調査を通じて提案されている ODA 事業及び期待される効果

「ラオス国ビエンチャン市における医療廃棄物を中心とした有害廃棄物処理・管理改善事業」を想定している。ラオスでの環境整備パイロットプロジェクトの実施成果を継承・補完すべく、医療廃棄物の発生源における分別・収集運搬・中間処理・最終処分にて生じている課題の改善を目標とし、特に分別及び収集・運搬過程と中間処理過程の二つに重点を置いた普及・実証事業を展開する。また、VUDAA には当社の徹底した適正処理技術ならびに運用方法を技術移転し、VUDAA の管理能力向上を通じて、医療廃棄物処理・管理改善を実現する。

4) 大西の派遣について「医療機関連携促進／院内調査専門家」

- 第1回現地調査 (2016年11月20日～26日)
- 第2回現地調査 (2017年3月8日～14日)
- 第3回現地調査 (2017年7月5日～8日)

5) 普及・実証事業の提案

最終処分場内に、有害廃棄物の焼却処理デモンストレーションを行うためのプラントを設置し、有害廃棄物の分別管理および無害化に関する知識やスキルを VUDAA 職員に移転することを目論んでいる。

6-2 モンゴル国 一次及び二次レベル医療施設従事者のための卒後研修強化プロジェクト

本案件は、2015年5月11日～2020年5月10日の予定でモンゴルにおいて実施されている JICA 技術協力プロジェクトである。主に国際医療研究センター国際医療協力局から医師がチーフアドバイザーとして派遣されており、現地モニタリング調査（従来運営指導調査と称したもの）の団員として大西が派遣された。

1) 現状

モンゴルでは、モンゴル保健科学大学の卒業生が1学年 600 人に及ぶと共に、他の私立医学部が急増し、卒前臨床教育は不十分なまま運営されている。また、地域医療現場は医師不足に苦しんでおり、卒後すぐの医師を地方の保健センターや診療所に派遣する制度が継続されてきた。

しかし、モンゴル国内でもこのことは問題視され、2017年秋から初期研修制度を始めるべく法整備が進んだ。ただ、2017年度は志望者がおらず、仕切り直しとなったため、2018年度に本格的に制度を開始すべくプロジェクトが本腰を入れている。

2) 派遣目的

- 主たるカウンターパートである保健開発センター（CHD）の業務改善、新たな初期研修制度のうち総合診療研修と呼ばれる 44 週間の基本研修（内科・外科／救急・小児科・産婦人科を含む）カリキュラム開発、地方での研修運営の具体的指導の方向性の決定。
- 地方（特にオルホン県）でのプロジェクトサテライトオフィスの設置について、地方での業務内容、中央からの支援方法、予算や人員配置の詳細検討。
- 上記を踏まえた Project Design Matrix（プロジェクトの計画設計図のようなもの）の改訂。

3) 派遣期間

2017年11月29日～12月8日（短期専門家）

（大西）

6-3 Pacific Partnership 2016 (パラオ) および 2017 (ベトナム) における活動報告

2004年のスマトラ島沖地震、インド洋大津波への災害派遣を機に、2007年より米軍が始めた人道支援・災害救援の能力向上のための多国間事業である Pacific Partnership に 2016年8月および2017年5月にそれぞれ NGO の一員として参加を行った。本事業は米海軍を主体とする船艇が毎年アジア太平洋地域の複数の国々を訪問し、参加国の政府機関、軍及び NGO との協力を通じ、医療活動、施設補修や文化交流を行うことにより、関係各国の相互理解、連携強化さらには国際的な安全保障環境の改善を図ることが目的とされている。以下、Pacific Partnership 2016 (パラオ共和国) および 2017 (ベトナム社会主義共和国) における活動記録を記述する。

1) Pacific Partnership 2016

2016年8月4日から8月15日にかけて、NGO の一員として Pacific Partnership 2016 に参加を行った。同事業では、フィリピン、ベトナム等において米国主導で活動が行われたが、パラオにおいては日本主導で活動を行うことになり、自身もその一員としてパラオの各地で医療支援活動を行いながら、自衛隊の輸送艦でアメリカ、イギリス、オーストラリアの医療関係者らと生活を共にした。パラオはフィリピン東部の西太平洋に散在する島嶼地域であるミクロネシアにおいて、約 300 の島々から形成される、人口約 2 万人の国である。現地での活動として、同国において唯一となる国立病院での医療支援活動および教育活動に加え、2つの島において野外診療を実施した。同国では肥満をはじめとする生活習慣病の対策に課題を抱えているが、今回の診療支援活動を通じて、生活指導や栄養管理に対する指導が十分には行き届いていないという印象を受けた。また、定期的な通院が必要であるにも関わらず財政難のため十分に通院出来ない事例が散見され、本活動への参加を通じて、同国に特有の生活背景や社会状況があるという事実を知ることが出来た。一方、各現場において、限られた時間の中で状況を把握し、現地医療スタッフと関係を築く必要があった。上述した経験から、現場のニーズを把握し、その文脈に沿う形で医療支援活動を行うことの難しさも体感した。今回の経験を振り返り、自身にとって初となる南太平洋での多国籍医療チームによる医療支援活動であったが、これまでの臨床経験や教育現場における実践経験を最大限に活かすことの出来る機会であったと実感した。

2) Pacific Partnership 2017

2017年5月7日から5月18日にかけて、同年度は NGO 代表として Pacific Partnership 2017 に参加した。前年と同様にアメリカ、イギリス、オーストラリアの医療関係者らと協力し、ベトナム (ダナン) において医療支援活動を行った。本年度の活動では、現地のいくつかの病院で医療活動を行いながら、多職種を対象にした教育活動を実施した。主に自身が活動したのは、ダナン総合病院という 1,200 床の病床を有する、同地域の中核病院で

あった。医療活動としては、同病院の救急外来において現地の若手医師らと共に外来診療を行った。また、教育活動については、5 micro skills という医療者向けの教育スキルに関する講義を実践した。現地では若手の医療者を除いては英語が十分に通じず、現地の医学生の通訳のもとで、英語で準備した資料の一部をベトナム語に翻訳して頂きながら教育実践を行った。上述したとおり、英語が十分に通じない文化圏での医療および教育活動経験を通じ、現地における医療現場のニーズを把握し、その文脈に沿った形で医療支援活動を行う難しさをあらためて体感した。一方、NGO 代表という前年度とは異なる立場で本事業に参加をさせて頂き、事前情報が不十分な現場においてリーダーシップを発揮すること、あるいは何らかの決断を迅速に行わなければならなかった経験は、自身にとっては非常に貴重であった。

以上、Pacific Partnership 2016 および 2017 における活動記録を記述した。同事業への参加を機に、自身はパラオで唯一となるベラウ国立病院の医療スタッフらとの関係を継続し、2017 年 3 月にも現地において医療支援活動を行った。その後もパラオにおける医療の質の改善を目的とした支援活動を継続しており、2018 年にも現地で遠隔診療を用いた医療支援および教育活動を実施する予定である。

林 幹雄 (医学教育国際研究センター 大学院博士課程 2 年)

Ⅱ 研究業績一覧 2016-2017

教授 江頭正人 2017年業績

【原著論文】

1. Yamanaka T, Hirota Y, Noguchi-Watanabe M, Tamai A, Eto M, Iijima K, Akishita M. Changes in attitude of medical students toward home care during a required two - week home care clinical clerkship program. Geriatr Gerontol Int. (In press)
2. Ishikawa H, Son D, Eto M, Kitamura K, Kiuchi T. Changes in patient-centered attitude and confidence in communicating with patients: a longitudinal study of resident physicians. BMC Med Educ. 2018;18:20. DOI 10.1186/s12909-018-1129-y
3. 江頭正人. フレイル高齢者の心房細動と抗凝固療法. 心臓. 2017;49:532-6.
4. 江頭正人. 高齢者の治療. 診断と治療. 2017;105:1179-83.

【学会発表】

- ・ 江頭正人: 高齢心房細動患者に対する抗凝固療法 (教育講演) . 第 59 回日本老年医学会学術集会. 名古屋. 2017.6.14.

【講演・セミナーなど】

1. 医学教育セミナー「医学教育の現状と未来」. 2017.10.10
2. 鉄門倶楽部病院長会議講演「東京大学における医学教育の現状と将来」. 2017.11.20.
3. 文科省研究委託事業「医学教育モデル・コアカリキュラム H28 年度改訂版に係るシンポジウム」 (司会進行) . 2017.12.14.

【学内活動】

- 学部学生・院生教育関連
 - ・ 駒場教養学部 初年次ゼミナール (理科) 2017.5~7
 - ・ 駒場教養学部 自然科学ゼミナール 2017.9~2018.1
 - ・ 臨床導入実習I・II (M2)
 - ・ 医学教育基礎コース
 - ・ 共用試験 OSCE (M2)
 - ・ 臨床実習後試験 (M4)
 - ・ IPE (M2)
 - ・ 共用試験 CBT
 - ・ 理科3 類面接試験
 - ・ 推薦入試
 - ・ 教務委員会
- 病院教育関連
 - ・ 新入職医師対象研修会
 - ・ 内科科長会議
 - ・ 病歴管理委員会
 - ・ 東大病院内科専門研修プログラム研修委員会 (J-OSLER 関連)

【その他】

- ・ 日本老年医学会専門医制度委員会
- ・ 医師国家試験

講師 大西 弘高 2016-2017 業績

2016～2017 年は、一時期学内の医学教育の業務も増えつつあったところから、改めて国際協力分野へと軸足を戻す期間となった。また、様々な研究でのコラボレーションも増え、自らも佐賀大学大学院より博士の学位を授与されるなど、改めて研究面での基盤を広げる期間となった。

2016 年度厚生労働科学研究の「医療関係職種の養成課程内容共通度の調査研究」は、17 の医療・福祉関連職種の代表と議論を重ねてカリキュラム上の問題に迫るといって非常に難しいプロジェクトであった。幸いにもこの内容を評価していただき、後継案件につながっている。このように、教育分野から派生した地域包括ケアなどの国家的問題に関わるようになってきているのも新たな強みとなっている。

2016 年 9 月末には、これまでお世話になった北村聖教授が栄転され、しばらくはセンターの主任的な立ち位置での仕事もさせていただいた。2017 年 5 月に江頭正人教授が着任され、引き続き仕事をさせていただけるのはありがたい限りである。今後も、医学教育国際協力学部部門を力不足ながらも引き立てていきたい。



【国際協力活動】

(海外)

1. 国際協力機構 (JICA) 関連

- ① ラオス国ビエンチャン市における医療廃棄物を中心とした有害廃棄物処理・管理改善に向けた案件化調査 (「医療機関連携促進/院内調査」業務担当)
 - ・ 第 1 回現地調査 (2016 年 11 月 20 日～26 日)
 - ・ 第 2 回現地調査 (2017 年 3 月 8 日～14 日)
 - ・ 第 3 回現地調査 (2017 年 7 月 5 日～8 日)
- ② モンゴル国一次及び二次レベル医療施設従事者のための卒後研修強化プロジェクト
 - ・ 現地モニタリング調査 (「医学教育」担当) (2017 年 11 月 29 日～12 月 8 日)

(国内)

Bangladesh 医療視察団受入 (2016 年 7 月 13 日)

【研究費】

(科学研究費)

1. 2015～2017 年度 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C) (一般) 「看護領域における臨床推論教育の概念整理と改善された教育プログラムの開発 (研究代表者、大西弘高)」、2016 年度 1,300,000 円、2017 年度 1,430,000 円
2. 2014～2016 年度 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C), 「6 年次学生の問題基盤型学習テューター実践による教育能力開発・運営上の効果」 (研究代表者、小田 康友)。研究分担者、分担金: 2016 年度 100,000 円
3. 2014～2016 年度 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C) (一般), 「高齢者のケア内容を決定する際の臨床推論に対する教育プログラムの方向性 (研究代表者、大西弘高)」。2016 年度: 1,430,000 円
4. 2015～2017 年度 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C) (一般) 「二職種間意思決定プロセスを円滑にする教育プログラムの開発と評価 (研究代表者、杉本 なおみ)」、研究分担者、分担金: 2016 年度 104,000 円、2017 年度 65,000 円
5. 2016～2018 年度 科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 基盤 (B), 「看護基礎能力の評価指標開発と IBL の進化によるプロフェッショナル教育モデルの確立 (研究代表者、

西菌貞子)、研究分担者、分担金：2016年度 260,000円、2017年 260,000円

6. 2016～2018年度 科学研究費助成事業(科学研究費補助金)基盤(B),「バーチャルリアリティを用いた糖尿病足病変ハイリスク要因アセスメント教育モデル開発(研究代表者、任和子)」。研究分担者、分担金：2016年度 325,000円、2017年 260,000円
7. 2017年度文部科学省大学改革推進委託費「平成29年度大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業(医学教育モデル・コア・カリキュラム等の次期改訂に向けた調査・研究)」金額：7,000,000円

(厚生労働科学研究)

1. 2016年度厚生労働科学特別研究事業補助金「医療関係職種の養成課程内容共通度の調査研究(H28-特別-指定-010)(研究代表者、大西弘高)」金額：4,174,000円
2. 2017年度厚生労働行政推進調査事業補助金「保健医療福祉関係職種の基礎教育課程の移行及び対人支援を行う専門職に共通して求められる能力とその教育方法に関する研究(H29-特別-指定-026)(研究代表者、堀田聡子)」研究分担者、分担金：1,000,000円

(受託研究費)

1. 2016～2017年度受託事業費(独)国際協力機構「ラオス国ビエンチャン市における医療廃棄物を中心とした有害物処理・管理改善に向けた案件化調査」金額：3,055,320円

【原著】

1. Nomura O, Onishi H, Kato H. Medical students can teach communication skills—a mixed methods study of cross-year peer tutoring. *BMC medical education*, 17(1), 103, 2017
2. 土屋瑠見子, 吉江悟, 川越正平, 平原佐斗司, 大西弘高, 村山洋史, 西永正典, 飯島勝矢, 辻哲夫. 在宅医療推進のための多職種連携研修プログラム開発: 都市近郊地域における短期的効果の検証. *日本公衆衛生雑誌* 64(7): 359-370, 2017
3. 大西弘高. 学習者評価とコンピテンシー基盤型教育. *医療職の能力開発* 4(1): 21-28, 2017
4. Onishi H. Assessment of Clinical Reasoning by Listening to Case Presentations: VSOP Method for Better Feedback. *Journal of Medical Education and Curricular Development* 3: 125-131, 2016
5. 大生定義, 大西弘高, 吉井文均, 森本剛, 宮田靖志, 高屋敷明由美, 佐藤雄一郎, 井上真智子, 平形道人. 医学教育に関わる利益相反の課題. *医学教育* 47(3): 174-177, 2016
6. 大西弘高, 大生定義, 吉井文均, 森本剛, 宮田靖志, 高屋敷明由美, 佐藤雄一郎, 井上真智子, 平形道人. 医学教育研究における研究倫理. *医学教育* 47(3): 171-173, 2016
7. 片岡仁美, 関明穂, 川畑智子, 勅使川原早苗, 岩瀬敏秀, 小比賀美香子, 大西弘高. 女性医師のライフイベントを考慮したキャリア支援: 岡山大学アンケート調査. *医学教育* 47(2): 111-123, 2016

【総説】

1. 大西弘高. 科学的根拠が不十分な場合, やらない方がよいとされる場合の介入はどうするか?尿検による腎疾患の二次予防を例に. *Gノート* 4(3): 566-574, 2017
2. 大西弘高. 私の処方: 爪白癬へのクレナフィン外用. *Modern Physician* 37(5): 499, 2017
3. 大西弘高. 【価値に基づく医療—患者にとっての最善の選択をめざして】価値に基づく診療(VBP)とは何か. *Modern Physician* 36(5): 405-410, 2016
4. 大西弘高. 【医学教育の現在: 現状と課題(Vol.13)】医学教育における評価. *医学のあゆみ* 257(7): 795-802, 2016
5. 安藤公美恵, 林寛之, 大西弘高. 【プロ×プロ イナダ(研修医)も学べばブリ(指導医)になる現場のプロと臨床推論のプロが教える診断能力アップ術(最終回)】、もう歳だから?(身体機能の低下). *治療* 98(7): 1144-1152, 2016
6. 澤田裕介, 林寛之, 大西弘高. 【プロ×プロ イナダ(研修医)も学べばブリ(指導医)になる現場のプロと臨床推論のプロが教える診断能力アップ術(第11回)】、「ヒツジと菓の、その前

に..... 治療 98(6): 906-913, 2016

7. 田中惇也, 林寛之, 大西弘高. 【プロ×プロ イナダ(研修医)も学べばブリ(指導医)になる 現場のプロと臨床推論のプロが教える診断能力アップ術(第10回)], 「外傷だ〜。これは、すぐに頭部 CT だ〜」ではないよ!, 治療 98(5): 750-757, 2016
8. 八幡えり佳, 林寛之, 大西弘高. 【プロ×プロ イナダ(研修医)も学べばブリ(指導医)になる 現場のプロと臨床推論のプロが教える診断能力アップ術(第9回)] 胸痛に惑わされて(胸痛), 治療 98(4): 594-601, 2016
9. 田中惇也, 林寛之, 大西弘高. 【プロ×プロ イナダ(研修医)も学べばブリ(指導医)になる 現場のプロと臨床推論のプロが教える診断能力アップ術(第8回)] 先生!おじいちゃんの鼻血が、鼻血が止まらないんですけど!!, 治療 98(3): 458-464, 2016
10. 山中俊祐, 林寛之, 大西弘高. 【プロ×プロ イナダ(研修医)も学べばブリ(指導医)になる 現場のプロと臨床推論のプロが教える診断能力アップ術(第7回)] 先生!こ.....腰が!!!!(腰痛ギックリ腰のビックリ pitfall!!), 治療 98(2): 308-317, 2016
11. 林寛之, 大西弘高. 【プロ×プロ イナダ(研修医)も学べばブリ(指導医)になる 現場のプロと臨床推論のプロが教える診断能力アップ術(第6回)] 頭がしめつけられる、突然.....??(頭痛), 治療 98(1): 149-157, 2016

【著書・訳書】

1. 林寛之, 大西弘高編著. イナダ(研修医)も学べばブリ(指導医)になる: 現場のプロと臨床推論のプロが教える診断能力アップ術. 南山堂. 東京. 2017
2. 伊藤敬介, 大西弘高編著. ナースのための臨床推論で身につく院内トリアージ: 最速・最強の緊急度アセスメント. 学研メディカル秀潤社. 東京. 2016
3. 大西弘高. 医学教育と教育工学. 中山実, 鈴木克明編. 職業人教育と教育工学 (教育工学選書II第15巻). pp20~42. ミネルヴァ書房. 京都. 2016
4. 大西弘高. 3年間を通じた学び方: ポートフォリオを活かした学び. 草場鉄周編. 総合診療専門研修の手引き4: 何をどう教え学ぶか工夫と実例. pp137~144. 中山書店. 東京. 2016
5. 大西弘高. 診療所で初期研修の指導を任されたけどどうすればいいんだろう. 草場鉄周, 一瀬直日編. 総合診療専門医腕の見せどころ症例2: 最上のポートフォリオに向けて. pp118~125. 中山書店. 東京. 2016
6. KWM (Bill) Fulford, Ed Peile E, Heidi Carrell 著, 大西弘高, 尾藤誠司監訳. 価値に基づく診療. メディカル・サイエンス・インターナショナル, 東京, 2016

【学会発表-国内】

1. 山本健, 大西弘高. 上部消化管内視鏡被験者体験の教育的効果や問題点に関する質的研究. 第94回日本消化器内視鏡学会. 福岡. 2017.10.12~15
2. 杉本 なおみ, 酒井 郁子, 藤沼 康樹, 大西 弘高, 【医師・看護師間連携能力の鍵を握る「クリティカルポイント」事例】、第9回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会、京都、2017.09.16~17
3. 小宮山学, 家研也, 田原正夫, 村田亜紀子, 市川周平, 竹村洋典, 大西弘高. 医学部6年次生の診療専門家選択に関する基礎資料: JMECS study 記述統計. 第49回医学教育学会大会. 札幌. 2017.8.18.~19
4. 家研也, 村田亜紀子, 田原正夫, 小宮山学, 市川周平, 竹村洋典, 大西弘高. 医学部6年次生の専門科選択に関わる因子の検討: JMECS study 二次解析. 第49回医学教育学会大会. 札幌. 2017.8.18~19
5. 村田亜紀子, 家研也, 田原正夫, 小宮山学, 市川周平, 竹村洋典, 大西弘高. 医学部6年次生の志向性・専門科選択への性差の影響: JMECS study 二次解析. 第49回医学教育学会大会. 札幌. 2017.8.18~19
6. 田原正夫, 家研也, 村田亜紀子, 小宮山学, 市川周平, 竹村洋典, 大西弘高. 将来のキャリアに研究や教育を志望する医学部6年次生についての検討 JMECS study 二次解析. 第

49 回医学教育学会大会. 札幌. 2017.8.18~19

7. 杉本なおみ, 酒井郁子, 藤沼康樹, 大西弘高. 二職種間意思決定プロセスを円滑にする教育プログラムの開発と評価: 医師・看護師間連携のクリティカルポイント調査. 第9回保健医療福祉連携教育学会学術集会. 東京. 2016.8.21
8. 仁田善雄, 森本剛, 大西弘高, 片桐瑞希, 北村聖, 大滝純司, 吉田素文, 齋藤宣彦, 医学系 OSCE 合同委員会. 共用試験医学系 OSCE の 10 年間にわたる研究. 第 48 回日本医学教育学会. 大阪. 2016.7.29~30
9. 野村理, 大西弘高, 加藤博之. 卒前屋根瓦式教育におけるチュータートレーニングの意義. 第 48 回日本医学教育学会. 大阪. 2016.7.29~30
10. 弘田義人, 山中崇, 玉井杏奈, 江頭正人, 孫大輔, 大西弘高, 飯島勝矢, 秋下雅弘. 医学生を対象とした模擬サービス担当者会議の意義. 第 18 回日本在宅医学会大会・第 21 回日本在宅ケア学会学術集会合同大会. 東京. 2016.7.16~17
11. 弘田義人, 山中崇, 江頭正人, 孫大輔, 大西弘高, 飯島勝矢, 秋下雅弘. 医学生は在宅医療を中心とする地域医療学実習で何を学んだか. 第 58 回日本老年医学会学術集会. 金沢. 2016.6.8~10
12. 山中崇, 弘田義人, 松本佳子, 孫大輔, 大西弘高, 飯島勝矢, 江頭正人, 秋下雅弘. 「医学部学生に対する地域医療学実習の効果に関する検討」. 第 58 回日本老年医学会学術集会. 金沢. 2016.6.8~10

【学会発表 - 海外】

1. Hiroataka Onishi. New clinical reasoning model from a diagnosis to management: three-layer cognitive (TLC) model. 14th Asia Pacific Medical Education Conference (APMEC). Singapore, Singapore. 2017. 1.11-15

【ワークショップ, 講演等-海外】

1. Hiroataka Onishi, An Educational Intervention of Interprofessional Learning in Community Based Health Care, 1st Ais Pasific Interprofessional Education and Collaboration (APIPEC) Conference, Makassar, Indonesia, 2017.9.27~30
2. Hiroataka Onishi. Technology-assisted Learning. 4th SEARAME (South East Asia Regional Association for Medical Education) Conference. Yangon, Myanmar, 2016.11.16~18.
3. Hiroataka Onishi. Clinical reasoning workshop. 4th SEARAME (South East Asia Regional Association for Medical Education) Conference. Yangon, Myanmar, 2016.11.16~18.

【ワークショップ, 講演等-国内】

1. 大西弘高. パネルディスカッション「病院総合医の育成に不可欠な要素」病院総合医の国際比較と現状. ジェネラリスト教育コンソーシアム vol.12. 東京. 2017.9.3
2. 大西弘高, 野村理. 価値に基づく診療(VBP)ワークショップ: 根拠に基づく診療を補強する枠組み. 第9回日本医療教授システム学会総会. 広島. 2017.3.2~3
3. 大西弘高. 次世代のリーダーシップ. 第9回日本医療教授システム学会総会. 広島. 2017.3.2~3
4. 大西弘高, 尾藤誠司, 野村理. 価値に基づく診療(VBP)シンポジウム. 東京. 2017.2.12
5. 大西弘高. ポートフォリオ作成・指導の悩み相談室 これから在宅医療認定専門医をめざす医師・指導医大集合. 第18回日本在宅医学会大会・第21回日本在宅ケア学会学術集会合同大会. 東京. 2016.7.16~17

【学内教育活動他】

1. 東京大学医学教育セミナー
 - 第 89 回「医学教育モデル・コア・カリキュラムの今後」2016.4.21

2. 東京大学医学教育基礎コース
 - 2015年第9回「臨床推論の教育」2016.2.17
 - 2016年第1回「医学教育はじめの一步」2016.5.13
 - 2016年第2回「良い教育者になるために」2016.6.15
 - 2016年第5回「教育を計画する」2016.10.19
 - 2016年第8回「臨床推論の教育」2017.1.18
 - 2017年第1回「医学教育はじめの一步」2017.5.17
 - 2017年第2回「良い教育者になるために」2017.6.14
 - 2017年第5回「教育を計画する」2017.10.25
3. 東京大学医学系研究科国際保健学専攻
 - 医学教育国際協力学 I (S1 ターム)、II (A1 ターム)
4. 東京大学医学系研究科公共健康医学専攻
 - 保健医療人材育成学 (S1 ターム)
 - 学習者評価学 (A1 ターム)

【学会・委員会】

1. Association for Medical Education in Europe
 - Journal “Medical Teacher” Editorial board member
2. Lao Medical Journal
 - International Editorial Board member
3. Korean Journal of Medical Education
 - Editorial board member
4. Journal of Medical Education and Curricular Development
 - Editorial board member
5. 日本プライマリ・ケア連合学会
 - 理事 (2014.6~2018.5)
 - プログラム認定委員会副委員長 (2014.6~2016.5)、委員長 (2016.6~)
 - 専門医認定委員会副委員長 (2014.6~2018.5)
 - 専門医制度運営会議 (2016.6~)
6. 日本医療教授システム学会
 - 常任理事、副代表理事
 - 編集委員会委員長
 - 倫理委員会委員

【非常勤教員】

1. 大阪医科大学大学院看護学研究科
2. 三重大学大学院医学系研究科
3. 公益社団法人日本看護協会講師

講師 孫 大輔 2016-2017 業績

【原著論文】

1. Ishikawa H, Son D, Eto M, Kitamura K, Kiuchi T. Changes in patient-centered attitude and confidence in communicating with patients: a longitudinal study of resident physicians. BMC Med Educ. 18: 20, 2018
2. Wong JG, Son D, Miura W. Cross-Cultural Interprofessional Faculty Development in Japan: Results of an Integrated Workshop for Clinical Teachers. Am J Med Sci. 354(6): 597-602, 2017
3. Ishikawa H, Son D, Eto M, Kitamura K, Kiuchi T. The information-giving skills of resident physicians: relationships with confidence and simulated patient satisfaction. BMC Med Educ. 17(1): 34, 2017
4. Son D, Gunshin M, Wong JG. Improving Resident Teaching Through Clinical Case Conference Presentations in Japan. Am J Med Sci. 352(5): 531-532, 2016
5. 孫大輔, 平澤南波. プライマリ・ケアで用いられる医学用語の誤解に関する市民と医療者の認知の差. 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌. 8(1): 19-30, 2017
6. 松下翔, 孫大輔. 病気の子どもとそのご家族のための滞在施設は, 利用者とボランティアにとってどのような意義を持つか. 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌. 8(1): 31-48, 2017
7. 守本陽一, 孫大輔, 中村剛史. 学生主体の地域診断の取り組みとその教育学的効果について. 地域医学 31(4): 292-300, 2017

【総説・解説論文】

1. 孫大輔, 松繁卓哉, 牛山美穂, 畠山洋輔, 三澤仁平, 朝比奈真由美, ... & 児玉聡. 委員会報告 ワークショップ「共感と〈患者視点〉—医学教育への示唆」開催報告. 医学教育. 48(5): 311-314, 2017
2. 孫大輔. LGBT と健康格差. 治療. 99(1): 68-72, 2017
3. 孫大輔. ヘルスコミュニケーション—ダイアログが切り開く新しい地平. 作業療法ジャーナル. 51(11): 1122-1126, 2017
4. 孫大輔. 医療者と患者のコミュニケーション: 対等な立場としての関係性を築く. 在宅新療 0→100. 2(6): 490-495, 2017
5. 孫大輔. 医療者と非医療者のコミュニケーション. 治療. 98(2): 269-272, 2016
6. 孫大輔. 浮腫の患者さんに利尿薬を処方するときとは? 処方するならどう使い分ける? G ノート, 3(3): 493-499, 2016
7. 孫大輔. 対話型学習 カフェ型コミュニケーションによる学習の場「みんくるカフェ」. コミュニティケア. 18(9): 20-23, 2016
8. 孫大輔. 認知症に対する理解のない地域. G ノート. 3(6): 1121-1125, 2016

【著書・訳書】

1. 孫大輔. III章 臨床技能ワークブック. 総論 診療の構造. pp391-397, 総合診療専門医のためのワークブック (総合診療専門医シリーズ). 草場鉄周編. 中山書店. 2017
2. 孫大輔. 第9章 超高齢社会とカフェ型ヘルスコミュニケーションにおける学び. pp164-181, 「ラーニングフルエイジング」とは何か—超高齢社会における学びの可能性. 森玲奈編. ミネルヴァ書房. 2017
3. 孫大輔. 第3章 高齢者の健康・介護問題をめぐるカフェ型ヘルスコミュニケーション—みんくるカフェと変容的学習. pp85-101, 高齢者介護のコミュニケーション研究. 石崎雅人編. ミネルヴァ書房. 2017

4. 孫大輔. 第4部 人材開発研究の創発的展開 第31章 医療従事者の変容的学習. pp781-799, 人材開発研究大全. 中原淳編. 東京大学出版会. 2017
5. 孫大輔. 31 慢性腎臓病. pp285-291, Common Disease の診療ガイドライン (Gノート別冊). 横林賢一,他編. 羊土社. 2017
6. 孫大輔. 2. 実践・連携編:多職種連携 (IPW) とは. pp158-165, 医師として知っておくべき介護・福祉のイロハ. 大橋博樹編. 羊土社. 2016
7. 孫大輔(訳). 第6章 喫煙にまつわる謎:知識を得ること, 得ないこと—VBP の要素その3 価値に関する知識. pp85-106, 価値に基づく診療 VBP 実践のための10のプロセス. 大西弘高・尾藤誠司監訳. メディカル・サイエンス・インターナショナル. 2016

【学会発表】

1. Son D, Honma M, Pickering J: Students' and Patients' Perspectives on National Education Outcomes in Japan: A Qualitative Research Study (Oral). Association for Medical Education in Europe (AMEE) 2017, Helsinki, Finland, 2017.8.26-30
2. Mitsuyama T, Son D: Urban Family Physician's Competencies in Japan: A Qualitative Study (Poster). 14th APMEC, Singapore, 2017.1.11-15
3. Son D, Shimizu I, Ishikawa H, Aomatsu M, Leppink J: How does the conceptual structure of empathy of Japanese medical students change by communication skills training?(Oral) Association for Medical Education in Europe (AMEE) 2016, Barcelona, Spain, 2016.8.27-31
4. Ishikawa H, Eto M, Son D, Kitamura K, Kiuchi T: Attitude and confidence in communicating with patients: A longitudinal study of resident physicians. 13th International Conference on Communication in Healthcare (ICCH), Heidelberg, Germany, 2016.9.7-10
5. Yamanaka T, Hirota Y, Tamai A, Iijima K, Son D, Onishi H, Eto M, Akishita M: Attitudinal change toward home care among medical students participating in community medicine clerkship. The American Geriatrics Society 2016 Annual Scientific Meeting, California, USA, 2016.5.19-21
6. 孫大輔, 本間三恵子, ピカリング・ジョイス: わが国における医学教育アウトカムに対する患者と医学生の視点 (口演). 第49回日本医学教育学会大会. 札幌. 2017.8.18-19
7. 堀田晶子, 木村光利, 孫大輔, 江頭正人: 臨床研修指導医のストレス因子について. 第49回日本医学教育学会大会 (口演). 札幌. 2017.8.18-19
8. 守本陽一, 孫大輔, 中村剛史: 学生主体の地域診断の取り組みとその教育学的効果について (ポスター). 第49回日本医学教育学会大会. 札幌. 2017.8.18-19
9. 孫大輔, 密山要用, 米倉佑貴, 中山和弘: 認知症をテーマとしたカフェ型ヘルスコミュニケーションによる市民および医療介護福祉専門職の学び (口演). 第8回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 高松. 2017.5.13-14
10. 孫大輔, 上田昌文, 江間有沙, 川田美弥子, 河原克俊, 木村匠, 田中順子, 松下弓月, 密山要用, 山崎範子: 東京の谷根千地域における Community-Based Participatory Research (ポスター). 第8回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 高松. 2017.5.13-14
11. 密山要用, 孫大輔: 都市部の家庭医に必要とされるコンピテンシー:家庭医に対するインタビューの質的分析(口演). 第8回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 高松. 2017.5.13-14
12. 孫大輔, 密山要用, 松下弓月: 東京の「下町」におけるソーシャル・キャピタルと人々の健康—谷中・根津・千駄木における Community-Based Participatory Research からの示唆— (口演). 第43回日本保健医療社会学会大会. 京都. 2017.5.20-21
13. 油井清光, 松繁卓哉, 樫田美雄, 孫大輔: 科研費審査における学際的共同研究の扱いはどうあるべきか—科研費改革2018と保健医療社会学の未来—(ラウンドテーブルディスカッション). 第43回日本保健医療社会学会大会. 京都. 2017.5.20-21
14. 江頭真宏, 江間有沙, 孫大輔: 計画的行動理論に基づいたシリアスゲームによる生活習慣病対策行動変容メカニズムの解析 (口演). 第9回日本ヘルスコミュニケーション学会学

- 術大会. 京都. 2017.9.16-17
15. 矢部千鶴, 安来志保, 武者幸樹子, 孫大輔, 竹村洋典: 母乳保育に関する保育施設職員の考え (口演). 第 31 回日本助産学会学術集会. 徳島. 2017.3.18-19
 16. 孫大輔, 石川ひろの, 清水郁夫, 青松棟吉, レピンク・ジミー: コミュニケーション技能教育と医学生の共感の概念的構造 (口演). 第 48 回日本医学教育学会大会. 大阪. 2016.7.29-30
 17. 孫大輔, 富田さつき, 密山要用: 認知症をテーマとしたワールドカフェによる地域住民および医療福祉専門職の認知症に対する態度変化 (口演). 第 48 回日本医学教育学会大会. 大阪. 2016.7.29-30
 18. 澤山芳枝, 孫大輔, 金子英司, 北村聖: 模擬患者に対する「診断学」講義はシナリオの学習と演技にどう影響するか?(第 2 報) (口演). 第 48 回日本医学教育学会大会. 大阪. 2016.7.29-30
 19. 田中公孝, 孫大輔: 地域医療研修における初期臨床研修医の経験学習モデルにそった学びの分析 (口演). 第 7 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 東京. 2016.6.11-12
 20. 矢部千鶴, 安来志保, 武者幸樹子, 孫大輔, 竹村洋典: 保育施設における母乳の取り扱いに関する調査 (口演). 第 7 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 東京. 2016.6.11-12
 21. 守本陽一, 山本博子, 中野周平, 鳥越浩実, 村上千沙都, 今井貞之, 斉賀佳穂, 小倉優花, 孫大輔: 医療系学生による地域の健康課題を明らかにする地域診断の取り組み (ポスター). 第 7 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 東京. 2016.6.11-12
 22. 松繁卓哉, 牛山美穂, 孫大輔, 畠山洋輔, 三澤仁平: 〈患者視点〉の今日的課題—問題の所在、理論の再構築、臨床への活用— (ラウンドテーブルディスカッション). 第 42 回日本保健医療社会学会大会. 大阪. 2016.5.14-15
 23. 孫大輔, 平澤南波: プライマリケアで用いられる医学用語の医療者と市民・患者の認識ギャップ(第 2 報) (口演). 第 8 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会. 東京. 2016.9.10
 24. 松下翔, 孫大輔: 病気の子どもとそのご家族のための滞在施設は、利用者およびボランティアにとってどんな意義があるか (口演). 第 8 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会. 東京. 2016.9.10
 25. 松下翔, 孫大輔: 入院中の難病の子どもを持つ家族のための滞在施設に対する医療従事者の意識調査 (ポスター). 第 8 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会. 東京. 2016.9.10
 26. 河原克俊, 孫大輔: カフェ型ヘルスコミュニケーション「暮らしのカフェ」の意義 (ポスター). 第 50 回日本作業療法学会. 札幌. 2016.9.9-11
 27. 河原克俊, 孫大輔: 脳卒中者と医療者を対象としたカフェ型ヘルスコミュニケーション活動「暮らしのカフェ」(ポスター). 第 13 回東京都作業療法学会. 東京. 2016.11.19-20
 28. 弘田義人, 山中崇, 玉井杏奈, 江頭正人, 孫大輔, 大西弘高, 飯島勝矢, 秋下雅弘: 医学生を対象とした模擬サービス担当者会議の意義. 第 18 回日本在宅医学会大会・第 21 回日本在宅ケア学会学術集会合同大会. 東京. 2016.7.16-17
 29. 弘田義人, 山中崇, 江頭正人, 孫大輔, 大西弘高, 飯島勝矢, 秋下雅弘: 医学生は在宅医療を中心とする地域医療学実習で何を学んだか. 第 58 回日本老年医学会学術集会. 石川. 2016.6.8-10
 30. 山中崇, 弘田義人, 松本佳子, 孫大輔, 大西弘高, 飯島勝矢, 江頭正人, 秋下雅弘: 医学部学生に対する地域医療学実習の効果に関する検討. 第 58 回日本老年医学会学術集会. 石川. 2016.6.8-10
 31. 五十嵐歩, 松本博成, 油山敬子, 鈴木美穂, 青木伸吾, 安井英人, 孫大輔, 城島華子, 山本則子: 在宅認知症高齢者のコンビニエンスストア利用に関する 1 事例の検討: 地域包括ケアにおける協働の推進に向けて (ポスター). 第 58 回日本老年医学会学術集会. 石川. 2016.6.8-10
 32. 松本博成, 五十嵐歩, 油山敬子, 鈴木美穂, 青木伸吾, 安井英人, 孫大輔, 城島華子, 山本則子: コンビニエンスストアとスーパーマーケットの近接性が買い物行動の自立に与える影

響（ポスター）．日本老年社会科学会第 58 回大会．愛媛．2016.6.11-12

【招待講演】

1. Son D: Near Future of Primary Care in Japan: it's Role in Suicide Prevention. Joint symposium with Japan Primary Care Association. 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention / The 40th Annual Meeting of the Japanese Association for Suicide Prevention. Tokyo, Japan, 2016.5.18-21
2. 孫大輔, 密山要用: WS3. 家庭医療の core : 複雑性・不確実性に対処するためのワザ. 日本プライマリ・ケア連合学会 第 14 回春季生涯教育セミナー. 東京, 2017.6.11
3. 孫大輔: カフェ型ヘルスコミュニケーションを通じた地域住民と医療専門職の協働した健康づくり. Future SessionIII 住民が主役のコミュニティづくりー医療者の私たちができることー. リハビリテーション・ケア合同研究大会 茨城 2016. 2016.10.27-29

【研究費（代表）】

1. 平成 27～30 年度 文部科学省科学研究費補助金 若手研究(A) 課題番号 15H05658
テーマ: カフェ型ヘルスコミュニケーションを用いた地域住民協働による健康教育プログラム開発, 助成金額 7,280,000円 (直接経費 5,600,000円)

【教育関連活動：学内】

- 東京大学医学部教務委員会委員 (2012 年 4 月～)
- 東京大学医学部教務委員会「クリニカルクラークシップ支援部会」幹事 (2013 年 2 月～)
- 東京大学医学部教務委員会「Best Teacher's Award (BTA) 選考委員会」委員 (2014 年 4 月～)
- 東京大学医学部教務委員会「臨床実習小委員会」委員 (2015 年 4 月～)
- 東京大学医学部教務委員会「臨床実習後卒業試験準備委員会」委員 (2015 年 12 月～)
- 東京大学医学部教務委員会「多職種連携教育」担当委員 (2016 年 4 月～)
- 東京大学医学部教務委員会「医学教育検討委員会」委員長 (2016 年 4 月～)
- 模擬患者つつじの会 運営委員 (2012 年 4 月～)、同 代表 (2013 年 4 月～)

【学会等活動】

- 日本医学教育学会 教育研究・利益相反委員会委員 (2016 年 4 月～)
- 日本医学教育学会 プロフェッショナリズム・行動科学委員会委員 (2016 年 4 月～)
- 日本医学教育学会 認定医学教育専門家資格制度ワーキングメンバー (2017 年 4 月～)
- 日本プライマリ・ケア連合学会 健康の社会的決定要因検討委員会委員 (2015 年 4 月～)
- 日本ヘルスコミュニケーション学会 運営委員 (2015 年 5 月～)、同 編集委員会委員 (2017 年 10 月～)
- 日本保健医療社会学会 国際交流委員会委員 (2017 年 10 月～)

大学院博士課程 山本 健

【学歴】

2007年3月 京都府立医科大学医学部医学科卒業

2014年4月 東京大学医学部内科学博士課程入学

【職歴】

2007年4月～2009年3月 東京北社会保険病院（現：東京北医療センター） 初期研修医

2009年4月～2011年3月 済生会松山病院内科後期研修医

2011年4月～2014年3月 済生会松山病院内科医員

2014年4月～現在 王子生協病院内科，竜泉協立診療所，大泉生協病院内視鏡，辻川ホームクリニックなどで非常勤医師

2014年9月～12月 Northern Ontario School of Medicine でのインターンシップ

【学位・資格】

日本内科学会総合内科専門医（29891号）

日本内科学会認定医（45239号）

日本消化器病学会専門医(35043号)

日本消化器内視鏡学会専門医(20140600号)

日本肝臓学会専門医（7585号）

日本プライマリ・ケア連合学会認定医(2013-104号)

インфекションコントロールドクター(ID4114号)

【教育関連活動業績】

＜学外・院外活動＞

1. 2016年4月～2017年3月 共用試験実施評価機構 Post-CC OSCE 準備検討委員会医学系ワーキンググループ委員
2. 2017年4月～現在 共用試験実施評価機構 Post-CC OSCE 医学系トライアル実施小委員会委員
3. 2017年5月～現在 共用試験実施評価機構 Post-CC OSCE 医学系トライアル実施小委員会トライアル評価専門部会委員
4. 2017年10月～現在 共用試験実施評価機構 Post-CC OSCE 外部評価者養成専門部会委員

【教育研究業績】

＜学術論文,書籍(査読なし)＞

1. 山本健，日経メディクイズ救急. 日経メディカル. 580号，2016;79-80
2. 山本健，日経メディクイズ救急. 日経メディカル. 593号，2017;67-68
3. 徳田安春，山本健，他. 症候別”見逃してはならない疾患”の除外ポイント 2016年4月初版第一刷，医学書院

＜国内学会発表＞

1. 山本健，他. 2017年6月第19回日本在宅医学会大会 2P-92 初期研修医は在宅医療研修で何を学ぶのか
2. 山本健，大西弘高，2017年10月第94回日本消化器内視鏡学会総会 JDDW2017 福岡 上部消化管内視鏡被験者体験の教育的効果や問題点に関する質的研究

大学院博士課程 林 幹雄

【取得資格】

Fellow of American College of Physicians, 2017年3月

【著書】

1. 林幹雄：カンファで学ぶ臨床推論「67歳男性：発熱と下痢」
2. 林幹雄：日経メディカル3月号，日経BP社，東京，2016：92-94

【原著論文（査読なし）】

1. 林幹雄：Common diseaseのエッセンシャルドラッグ：NSAIDs
2. 林幹雄：羊土社，東京，Gノート，vol.3 no.1, 2016：34-41

【学会発表】

(国内)

1. 林幹雄：退院サマリーに関する教育プログラム開発の試み. 第48回 日本医学教育学会大会，大阪，2016年7月
2. 林幹雄：南太平洋での多国籍医療チームによる国際医療協力事業に関する参加者評価の試み. 第17回 日本評価学会全国大会，広島，2016年11月

(国外)

1. Mikio Hayashi, Kiyoshi Kitamura：Evaluation of a pilot training program for discharge summary writing for physicians. 14th Asia Pacific Medical Education Conference, シンガポール, 2017年1月

【教育関連活動実績】

(学内)

1. 東京大学臨床推論勉強会（学部生対象）アドバイザー
2. 平成29年度 東京大学大学院 ティーチング・アシスタント
3. 平成29年度 東京大学大学院 医学系研究科 外国人留学生チューター
4. 平成29年度 東京大学 初年次ゼミナール理科 ティーチング・アシスタント

(学外)

1. 日本内科学会 病歴要約評価委員
2. 米国内科学会日本支部 Scientific Program Committee 委員
3. 日本プライマリ・ケア連合学会 関東甲信越ブロック 代議員
4. 日本プライマリ・ケア連合学会 指導医養成講習会 協力委員
5. 日本プライマリ・ケア連合学会 家庭医療専門医試験 作問担当
6. 王子生協病院 Key Features 作問担当

【医療支援活動】

1. Pacific Partnership 2016 参加（パラオ共和国）
2. Pacific Partnership 2017 参加：NGO代表（ベトナム社会主義共和国）
3. Medical Volunteer Activity：Belau National Hospital（パラオ共和国）

【講演・ワークショップ主催等】

<2016>

1. 林幹雄, 藤田尚己, 吉本尚: ACP 日本支部年次総会 2016 (ワークショップ) 「アルコール問題への介入～内科医の視点とプライマリ・ケア医の視点～」講師, 京都, 2016年6月
2. 林幹雄: 日本プライマリ・ケア連合学会 指導医養成講習会 講師, 東京, 2016年7月
3. 林幹雄: ベラウ国立病院 「5 step micro skill」講師, パラオ共和国, 2016年8月
4. 林幹雄, 茂木恒俊, 及川沙耶佳: 京都大学大学院医学系研究科 現場で働く指導医のための医学教育学プログラム-基礎編「カリキュラム評価と有名臨床研修病院の意味①」講師, 京都, 2016年11月
5. 林幹雄: 野口医学研究所 医学交流セミナー 講師, 東京, 2016年12月
6. 林幹雄, 茂木恒俊, 及川沙耶佳: 京都大学大学院医学系研究科 現場で働く指導医のための医学教育学プログラム-基礎編「カリキュラム評価と有名臨床研修病院の意味②」講師, 京都, 2016年12月
7. 林幹雄: 帝京科学大学医療科学部看護学科 2年生講義 「成人看護援助論～急性期看護論」講師, 東京, 2016年12月
8. 林幹雄: 防衛省 Pacific Partnership 2016 報告会 発表者, 東京, 2016年12月

<2017>

1. 林幹雄: 日本プライマリ・ケア連合学会 指導医養成講習会 講師, 東京, 2017年2月
2. 林幹雄: ダナン総合病院 「5 step micro skill」講師, ベトナム社会主義共和国, 2017年5月
3. 林幹雄, 藤本卓司: ACP 日本支部年次総会 2017 (ランチョンセミナー) 「頸部の診察」座長, 京都, 2017年6月
4. 林幹雄: ACP 日本支部年次総会 2017 ポスターセッション 座長, 京都, 2017年6月
5. 林幹雄: 日本プライマリ・ケア連合学会 秋季生涯教育セミナー 指導医養成講習会 講師, 大阪, 2017年11月
6. 林幹雄, 太田龍一, 及川沙耶佳: 京都大学大学院医学系研究科 現場で働く指導医のための医学教育学プログラム-基礎編「カリキュラム評価と有名臨床研修病院の意味」講師, 京都, 2017年11月
7. 林幹雄: 帝京科学大学医療科学部看護学科 2年生講義 「成人看護援助論～急性期看護論」講師, 東京, 2017年12月
8. 林幹雄: 橋本市民病院 研修医勉強会「一歩先をいくサマリーの書き方」講師, 和歌山, 2017年12月
9. 林幹雄: 橋本市民病院 ジェネラリスト勉強会「カリキュラム評価」講師, 和歌山, 2017年12月

大学院博士課程 密山 要用

【原著論文】

なし

【学会発表】

1. Mitsuyama T, Son D: Urban Family Physician's Competencies in Japan: A Qualitative Study(Poster). 14th APMEC, Singapore, 2017.1.11-15
2. 密山要用, 孫大輔: 都市部の家庭医に必要なコンピテンシー (口演). 第8回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 高松. 2017.5.13-14
3. 孫大輔, 密山要用, 米倉佑貴, 中山和弘: 認知症をテーマとしたカフェ型ヘルスコミュニケーションによる市民および医療介護福祉専門職の学び (口演). 第8回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 高松. 2017.5.13-14
4. 孫大輔, 上田昌文, 江間有沙, 川田美弥子, 河原克俊, 木村匠, 田中順子, 松下弓月, 密山要用, 山崎範子: 東京の谷根千地域における Community-Based Participatory Research (ポスター). 第8回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 高松. 2017.5.13-14
5. 孫大輔, 密山要用, 松下弓月: 東京の「下町」におけるソーシャル・キャピタルと人々の健康--谷中・根津・千駄木における Community-Based Participatory Research からの示唆-- (口演). 第43回日本保健医療社会学会大会. 京都. 2017.5.20-21

【教育関連活動・学内】

- ・東京大学医学教育国際研究センター主催 医学教育基礎コース 2017 運営担当

【教育関連活動・学外】

1. 王子生協病院 家庭医療後期研修プログラム 医学教育アドバイザー (2016-2017)
2. 密山要用, 飯岡緒美: 日本プライマリ・ケア連合学会 プライマリ・ケア認定薬剤師研修会 講師, 東京, 2016.3.6
3. 密山要用, 飯岡緒美: 日本プライマリ・ケア連合学会 プライマリ・ケア認定薬剤師発表会 講師, 東京, 2016.10.30
4. 密山要用, 飯岡緒美: 日本プライマリ・ケア連合学会 プライマリ・ケア認定薬剤師研修会 講師, 東京, 2017.3.6
5. 錦織宏, 宮地純一郎, 飯田淳子, 島菌洋介, 伊藤泰信, 堀口佐知子, 濱 雄亮, 密山要用, 錦織麻紀子, 森下真理子, 松井善典: 「医療人類学の知見をレンズに総合診療/家庭医療の実践を深める ——大学の総合診療から僻地の地域医療まで」(プレコングレスワークショップ 24) 第8回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 高松. 2017.5.13-14
6. 孫大輔, 密山要用: 家庭医療の core: 複雑性・不確実性に対処するためのワザ:日本プライマリ・ケア連合学会 第14回春季生涯教育セミナー. 東京. 2017.6.11

特任専門職員 澤山 芳枝

【国内学会発表】

澤山芳枝, 孫大輔, 金子英司, 北村聖. 模擬患者に対する「診断学」講義はパフォーマンスにどのような影響を与えるか? (第2報) 第48回日本医学教育学会大会. 2016年7月30日. 大阪医科大学.